

新溜上遺跡 大日後遺跡 井草本田遺跡群

一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 27 年 3 月

国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所
公益財団法人茨城県教育財団

新溜上遺跡
大日後遺跡
井草本田遺跡群

一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 27 年 3 月

国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を推進しています。

その一環として国土交通省が整備を推進している首都圏中央連絡自動車道は、都心部と中核都市を結ぶ3環状9放射の道路ネットワークです。この道路網の整備により、首都圏の交通混雑が緩和されるほか、環境改善、経済効率の向上など、様々な効果が期待されます。

しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である新溜上遺跡・大日後遺跡・井草本田遺跡群が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所から発掘調査の委託を受け、平成25年8月から12月までの5か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、新溜上遺跡・大日後遺跡・井草本田遺跡群の調査成果を収録したもので、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者であります国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、坂東市教育委員会、境町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成27年 3月




公益財団法人茨城県教育財団
理事長 鈴木 欣一

例 言

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成25年度に発掘調査を実施した、茨城県坂東市富田字新溜上408-2番地ほかに所在する新溜上遺跡（新溜上遺跡）、同市菅谷字大日後12-3番地ほかに所在する大日後遺跡（大日後遺跡）、及び猿島郡境町大字山崎字香取後2235番地ほかに所在する井草本田遺跡群（井草本田遺跡群）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成25年8月1日～12月31日
整理 平成26年4月1日～8月31日
- 3 発掘調査は、調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 酒井雄一
首席調査員 胸澤悦郎
調査員 中泉雄太
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、調査員盛野浩一が担当した。

凡 例

- 各遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、新溜上遺跡は $X = +10,400\text{ m}$ 、 $Y = +3,600\text{ m}$ の交点を、大日後遺跡は $X = +12,480\text{ m}$ 、 $Y = +1,720\text{ m}$ の交点を、井草本田遺跡群は $X = +13,240\text{ m}$ 、 $Y = 0\text{ m}$ の交点をそれぞれ基準点(A1a)とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。
この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。
大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3、…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a区」のように呼称した。
- 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。
遺構 FP - 炉跡 IS - 遺物集中地点 P - ビット SD - 溝跡 SI - 竪穴建物跡 SK - 土坑
SS - 石器出土地点
遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石核・剥片 TP - 拓本記録土器
土層 K - 攪乱
- 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。
 - 遺構全体図は400分の1、各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
 - 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
 - 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・赤彩		火床面・横維土器断面
	柱あたり・煤・黒斑		
●	土器	□	石器・石核
△	金属製品	----	硬化面
- 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。
- 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。
 - 計測値の単位はm、cm、gで示した。なお、現存値は（ ）を、推定値は[]を付して示した。
 - 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。
 - 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。
- 竪穴建物跡の「主軸」は、炉を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。
- 今回の報告分で、調査段階での遺構名を変更したものと及び欠番にしたものは以下のとおりである。

新溜上遺跡	変更	FP 1 → FP 2	FP 2 → SK79	FP 3 → SK80	FP 4 → FP 1	FP 5 → SK81
						SK72 → 第1号竪穴遺構
						欠番 FP 6 SI 6

大日後遺跡	変更	FP 2 → FP 4	SK34 ~ SK36	SX 1 ~ SX 3	IS 1 ~ IS 3
-------	----	-------------	-------------	-------------	-------------

欠番 FP 1 SK 2・SK 3・SK 5・SK25

井草本田遺跡群 変更 SA 1 P 1～P 4→SK19～SK22 SA 2 P 1～P 4→SK23～SK26

目 次

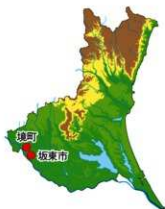
序	
例 言	
凡 例	
目 次	
新溜上遺跡・大日後遺跡・井草本田遺跡群の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	4
第2章 位置と環境	5
第1節 位置と地形	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 新溜上遺跡	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	13
1 旧石器時代の遺構と遺物	13
石器出土地点	13
2 縄文時代の遺構と遺物	15
(1) 炉跡	15
(2) 土坑	15
3 古墳時代の遺構と遺物	18
(1) 竪穴建物跡	18
(2) 竪穴遺構	35
4 その他の遺構と遺物	36
(1) 炉跡	36
(2) 土坑	36
(3) 溝跡	38
(4) 遺構外出土遺物	39
第4節 まとめ	43
第4章 大日後遺跡	49
第1節 調査の概要	49
第2節 基本層序	49
第3節 遺構と遺物	52
1 縄文時代の遺構と遺物	52

遺物集中地点	52
2 その他の遺構と遺物	55
(1) 土坑	56
(2) 溝跡	56
(3) 遺構外出土遺物	57
第4節 まとめ	58
第5章 井草本田遺跡群	61
第1節 調査の概要	61
第2節 基本層序	61
第3節 遺構と遺物	63
1 縄文時代の遺構と遺物	63
土坑	63
2 江戸時代の遺構と遺物	63
(1) 土坑	63
(2) 溝跡	66
3 その他の遺構と遺物	71
(1) 土坑	71
(2) 遺構外出土遺物	72
第4節 まとめ	73
写真図版	PL 1～PL14
抄録	

新溜上遺跡・大日後遺跡・井草本田遺跡群の概要

遺跡の位置と調査の目的

新溜上遺跡と大日後遺跡は坂東市の北西部に位置し、市内を南に向かって流れる江川えがわのそれぞれ左岸・右岸の台地縁辺部に立地しています。井草本田遺跡群は境町かいどがわの東部に位置し、鶴戸川から北東に伸びる低地の西側の台地縁辺部に立地しています。台地の標高は、新溜上遺跡と大日後遺跡が16～17m、井草本田遺跡群が16mです。3遺跡の調査は、国道468号首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の建設に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、公益財団法人茨城県教育財団が、平成25年8月から12月にかけて実施しました。



新溜上遺跡の調査の成果

調査の結果、旧石器時代と縄文時代、古墳時代の人々の生活の跡を確認しました。縄文時代後期（約4,000年前）の炉跡と土坑を確認し、調査区域内から



新溜上遺跡調査区遠景（南から）



新瀬上遺跡出土の古墳時代前期の土器

は縄文土器が多く出土しています。周辺には縄文時代のムラが広がっていたと思われます。また、古墳時代前期(約1,700年前)では、堅穴建物跡を5棟確認し、甕・壺・高坏など、様々な土器が出土しました。堅穴建物跡が南側に集まって確認できていることから、

ムラはさらに調査区の南側に広がっていくものと思われます。江川流域では、縄文時代や古墳時代の遺跡がほかにも調査されています。江川の流れは、人々の生活になくはならないものであったことが想像されます。

大日後遺跡の調査の成果

調査の結果、縄文時代早期(約7,000年前)の人々が、土器を捨てた場所を確認しました。土器が集中して見つかった場所のすぐ北側には、江川につながる小さな谷があります。縄文時代の人々は、こうした水を得やすい場所を利用しながら、食べ物を採って移動していたと考えられます。

井草本田遺跡群の調査の成果

調査の結果、江戸時代(約300年前)の土坑と溝跡を確認しました。2基の土坑は、出土した遺物から墓として利用されていたものと考えられ、形状は、



井草本田遺跡群調査区全景

当時の墓としては特徴的なものです。溝跡は、東西に走る深い1条と、南北に走る浅い5条を確認しました。南北に走る溝跡からは、何度も掘りなおした形跡がみられます。墓がある場所を区画するためのものであった可能性があります。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所は、首都圏へのアクセスを円滑にするために、坂東市及び境町において一般国道468号首都圏中央連絡自動車道の整備を進めている。

平成22年11月18日、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて、茨城県教育委員会は平成23年7月19日に現地踏査を実施し、井草本田遺跡群については平成23年10月26日・27日、11月17日に、大日後遺跡は平成23年11月1日・2日・18日に、新溜上遺跡は平成23年11月29日・30日、12月27日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。

茨城県教育委員会教育長は、井草本田遺跡群については平成23年12月8日、大日後遺跡については平成24年1月18日、新溜上遺跡については平成24年2月16日、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長あてに、事業地内に遺跡が存在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長は、大日後遺跡については平成24年2月7日、新溜上遺跡及び井草本田遺跡群については平成25年1月25日、茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。

茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、大日後遺跡については平成24年2月20日、井草本田遺跡群については平成25年2月15日、新溜上遺跡については平成25年3月5日、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長は、新溜上遺跡及び大日後遺跡については平成25年3月15日、井草本田遺跡群については平成25年6月14日、茨城県教育委員会教育長あてに、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。茨城県教育委員会教育長は、新溜上遺跡及び大日後遺跡については平成25年3月19日、井草本田遺跡群については平成25年6月20日、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長あてに、各遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答した。また、併せて調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成25年8月1日から12月31日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

新溜上遺跡・大日後遺跡・井草本田遺跡群の調査は、平成25年8月1日から12月31日までの5か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程 \ 期間	8月	9月	10月	11月	12月
調査準備 表土除去 確認	■	■	■		
遺構調査	■	■		■	■
遺物洗浄 写真整理	■	■	■	■	■
撤収					■



第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

新溜上遺跡は茨城県坂東市富田字新溜上408-2番地ほかに、大日後遺跡は茨城県坂東市菅谷字大日後12-3番地ほかに、井草本田遺跡群は茨城県猿島郡境町大字山崎字香取後2235番地ほかに所在している。

坂東市と境町は、茨城県の南西部に位置している。この地域は、比較的平坦な洪積台地である猿島台地と、鶴戸川や江川等により開析された谷津が樹枝状に入り込んだ沖積低地から形成されている。このような入り組んだ地形から、古環境を復元することができる。猿島台地は、関東平野のほぼ中央に位置し、西の利根川・荒川水系と東の鬼怒川・小貝川水系に隔てられた南北に長い台地である。標高は16～20mほどである。また、境町の西側には利根川によって形成された沖積低地が、坂東市の東側には江戸時代に飯沼を開発した低地が広がっている。標高は7～10mほどである。洪積台地上は主に畑地や宅地として利用され、沖積低地や開発された低地は水田として利用されている。

猿島台地は、新生代第四紀洪積世古東京湾時代に堆積した海性の砂層である成田層を基盤として、その上に斜交層離の顕著な砂礫で構成された竜ヶ崎層がある。さらに、灰白色の常総粘土層、表土の下を厚さ2～3mの褐色の関東ローム層が連続して堆積し、最上部は腐植土層になっている。

新溜上遺跡は、坂東市を南北に流れる江川左岸、大日後遺跡は、約3km上流の江川右岸で、それぞれ台地上の平坦部に立地している。標高はいずれも16～17mで、江川沿いの低地との比高は約3mである。大日後遺跡の東側には、飯沼に続く入沼の谷が入り込んでいる。井草本田遺跡群は鶴戸川の東部に入り込んだ谷津の西側斜面から台地上にかけて立地している。標高は16mで谷津との比高は約2mである。調査前の現況は、新溜上遺跡が山林及び畑地、大日後遺跡と井草本田遺跡群が畑地である。

第2節 歴史的環境

新溜上遺跡〈1〉、大日後遺跡〈2〉、井草本田遺跡群〈3〉が所在する猿島台地の中央部は、東に飯沼や入沼、西に長井戸沼、南に常陸川（現在の利根川）があった。これらの旧湖沼や、常陸川に流れ込む江川・鶴戸川といった小河川が、台地を樹枝状に開析し分断している。今回報告する遺跡の周辺は、発掘調査が行われておらず、詳しい状況が判明していない。ここでは、江川と鶴戸川流域にある遺跡などを含め、周辺の歴史的環境を概観する。

旧石器時代の遺跡は、本書で報告する新溜上遺跡のほか、江川下流域の菅生沼西岸に位置する北前遺跡¹⁾や高崎貝塚²⁾がある。両遺跡からは、瑪瑙やチャート、安山岩製のスクレイパーなどが出土している。また、井草本田遺跡群から西へ2kmほど離れた鶴戸川右岸にある西泉田伏木遺跡では、当財団の平成24年度の調査で、ホルンフェルス製の大型の尖頭器や黒曜石製の細石刃などが出土している。

縄文時代の遺跡は、猿島台地全域で数多く確認されている。早期の遺跡は、江川流域では本書で報告する大日後遺跡や前述した高崎貝塚があげられる。高崎貝塚では、早期末茅山式期の堅穴建物跡や炉穴群を確認している。鶴戸川流域では、西泉田伏木遺跡の対岸に位置する山崎遺跡群で野島式期を中心とする時期の炉穴群を確認した。宮東遺跡〈23〉や寺久向地遺跡〈27〉でも早期後葉の土器が採集されている。前期には海水面の上

界に伴い、古鬼怒湾が形成される。江川流域の北前遺跡や高崎貝塚では、黒浜式期を中心とする堅穴建物跡や地点貝塚を確認している。両遺跡の貝塚からは鹹水性の貝類遺体が出土しており、古鬼怒湾が現在の坂本市周辺まで入り込んでいたことが分かっている。ほかに寺ヶ崎南遺跡〈13〉、元屋敷遺跡〈29〉、荒井遺跡〈30〉などがあげられる。中期の遺跡は、集落が継続して営まれる高崎貝塚や今泉遺跡〈9〉、天神前遺跡〈33〉などがある。後期に入り、当地域では遺跡数が増加する傾向がみられる。新溜上遺跡や下流右岸に位置する宮内遺跡³¹⁾では炉や土坑が、高崎貝塚や隣接する原口遺跡³²⁾では堅穴建物跡を確認している。鶴戸川下流の鶴戸沼西岸では、山中後遺跡³³⁾があり、堅穴建物跡や土坑から安行2式の土器や土偶などが出土している。晩期から弥生時代にかけて遺跡数は減少している。宮内遺跡の西に隣接する長右衛門元屋敷遺跡³⁴⁾では、晩期の堅穴建物跡を1棟確認した。

当地域の弥生時代の様相は、調査事例が少なく不明な点が多い。確認されている遺跡は、後期に該当するものだけである。江川流域では、高崎貝塚で堅穴建物跡が確認されているほか、山崎遺跡群では土坑から二軒屋式土器が出土している。中ノ芝遺跡〈34〉からは、墓地の改修工事中に二軒屋式土器の壺を検出している。

古墳時代に入ると遺跡数の増加がみられる。江川流域では、本書で報告する新溜上遺跡のほか、宮内遺跡³⁵⁾、北前遺跡、高崎貝塚で集落が形成されている。前期の堅穴建物跡は、新溜上遺跡で5棟、宮内遺跡で6棟、高崎貝塚で11棟、北前遺跡で33棟を確認している。調査面積の関係もあるが、下流へ向かうほど集落規模が大きくなる傾向がみられる。高崎貝塚は中期まで、宮内遺跡は古墳時代以降も集落が継続している。前期の遺跡としてはほかに寺ヶ崎南遺跡、西浦遺跡〈20〉、宿遺跡〈31〉があげられる。古墳は、江川流域では半谷古墳群〈5〉、上出島古墳群³⁶⁾、高山古墳³⁷⁾などがあげられるが、新溜上遺跡の集落と同時期の前期の古墳は周辺では確認されていない。

奈良時代・平安時代の遺跡は、鶴戸川流域に点在しているが、型式比定の困難な土師器及び須恵器が採集されたのみの遺跡が多い。その中で、穴辺遺跡群〈36〉は下総国援嶋郡の郡衙候補地の一つとして考えられている。一方、江川流域における当該期の遺跡は、下流域にのみ確認できる。宮内遺跡では堅穴建物跡や掘立柱建物跡、鍛冶工房跡などを確認しており、製鉄・鍛冶に伴う集落であったことが分かっている。また、長右衛門元屋敷遺跡では蔵骨器を伴う火葬墓を確認しており、当地域周辺にも火葬が浸透しつつあることをうかがえる。

鎌倉時代になると、当地域は秀郷流藤原氏の後裔の下河辺氏が治める下河辺荘に属し、その後、室町時代に古河公方足利氏の支配下となっていく。この時期の遺跡として山崎遺跡群があげられ、武家屋敷跡と考えられる遺構や井戸跡などを確認している。室町時代末期になると、関東管領の後北条氏と北関東諸勢力との抗争が始まり、戦国の世となっていく。この地域周辺でも逆井城を始めとして、弓田城、胸寄城、長井戸城などの城郭が戦略上の拠点として築かれていった。生子出土銭〈19〉は、この頃に埋藏された備蓄銭で、この地区にいた富裕層の存在を示唆している。

江戸時代に入り、当地域は天領、旗本相馬家領及び関宿藩を始めとする大名領となる。以後、統治者がめまぐるしく入れ替わりながら幕末を迎える。幕府は、利根川の東遷や鬼怒川、小貝川の付け替えを行っていった。その中で、利根川水運の拠点として境河岸が形成され、繁栄を極めていく。また、享保年間には、飯沼の新田開発を行うなど、当地域周辺で大規模な開発を進めていった。山崎遺跡群や長右衛門元屋敷遺跡ではこの時期に利用されていた屋敷跡を確認している。

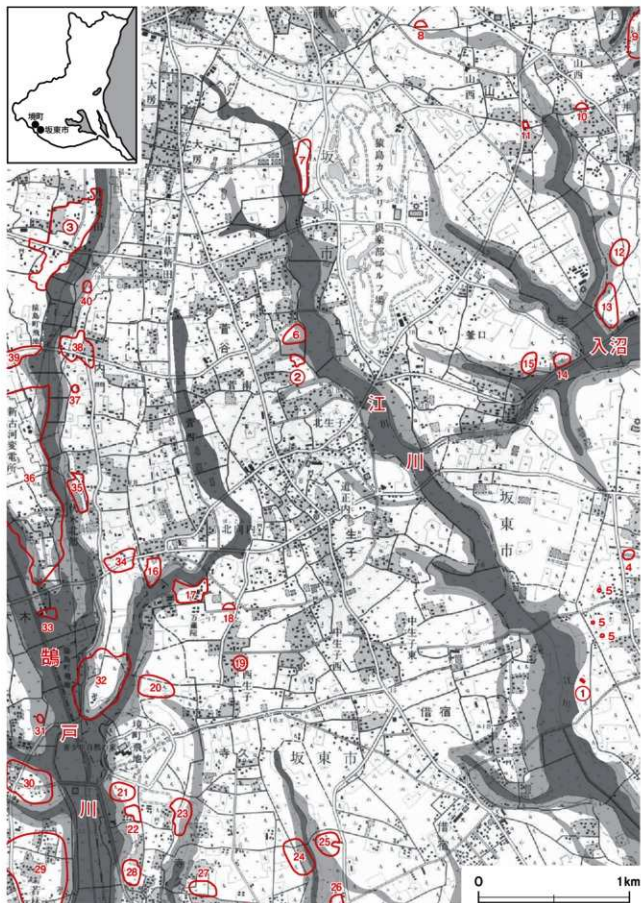
※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1の該当番号と同じである。

註

- 1) 大森雅之「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 原口遺跡・北前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第83集 1993年3月
- 2) 鶴見貞雄「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 高崎貝塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』第88集 1994年3月
- 3) 舟橋理 長洲正博 大島孝博「宮内遺跡 長右衛門元屋敷遺跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第387集 2014年3月
- 4) 註1)に同じ
- 5) 高野浩之 土生朗治 須藤和佳「山中後遺跡」『岩井市文化財調査報告』第3集 2001年3月
- 6) 註3)に同じ
- 7) 小林和彦 宮崎剛「宮内遺跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第359集 2012年3月
- 8) 岩井市教育委員会『上出島古墳群』1976年3月
- 9) 三木ますみ「2.高山古墳 岩井市の遺跡」『岩井市史遺跡調査報告書』第1集 1992年3月

参考文献

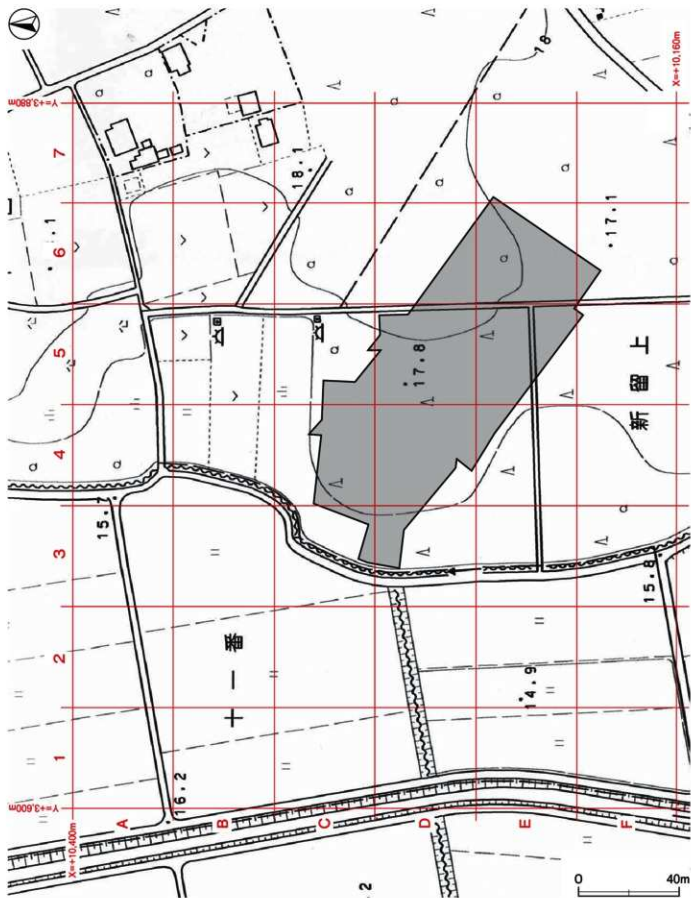
- ・茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- ・茨城県農地部農地計画課「土地分類基本調査 水海道」1985年12月
- ・猿島町史編さん委員会「猿島町史 資料編 原始・古代・中世」猿島町 1993年3月
- ・猿島町史編さん委員会「猿島町史 通史編」猿島町 1998年3月
- ・岩井市史編纂委員会『岩井市史（考古編）』岩井市 1999年3月
- ・岩井市史編纂委員会『岩井市史（通史編）』岩井市 2001年3月
- ・境町史編さん委員会「下総 境の生活史 地誌編 自然・動植物」境町 2004年3月
- ・境町史編さん委員会「下総 境の生活史 資料編 原始・古代・中世」境町 2004年3月
- ・境町史編さん委員会「下総 境の生活史 因説・境の歴史」境町 2004年3月
- ・佐久間好雄編「因説 古河・岩井・水海道・猿島の歴史」郷土出版社 2005年11月



第1図 新溜上遺跡・大日後遺跡・井草本田遺跡群周辺遺跡分布図(国土地理院 25,000分の1「下総境」
「石下」「宝珠花」「水海道」)

表1 新溜上遺跡・大日後遺跡・井草本田遺跡群周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町
①	新溜上遺跡	○	○	○				21	寺久台遺跡				○	○		
②	大日後遺跡		○				○	22	北山遺跡				○	○		
③	井草本田遺跡群		○				○	23	宮東遺跡		○		○	○		
4	半谷遺跡						○	24	三本松遺跡		○		○	○		
5	半谷古墳群			○	○			25	向原遺跡		○					
6	菅谷香取東遺跡		○					26	二ノ谷遺跡				○	○		
7	論手遺跡		○		○			27	寺久向地遺跡		○		○			
8	丹後塚						○	28	高札裏遺跡			○		○		
9	今泉遺跡		○		○			29	元屋敷遺跡		○		○			
10	おいの塚						○	30	荒井遺跡		○		○	○		
11	智泉院		○		○			31	宿遺跡		○		○			
12	寺ヶ崎北遺跡				○			32	大照院遺跡群		○		○	○	○	
13	寺ヶ崎南遺跡		○		○			33	天神前遺跡		○					
14	夏込遺跡				○			34	中ノ芝遺跡		○	○	○	○		
15	夏込東遺跡		○		○			35	六持遺跡		○					
16	道目遺跡		○					36	穴辺遺跡群		○		○	○		
17	坂口遺跡		○		○			37	福原遺跡		○					
18	愛宕塚 (生子古墳)						○	38	内門新田遺跡群		○		○	○		
19	生子出土銭					○		39	中大歩遺跡		○		○			
20	西浦遺跡		○		○			40	下新田福原遺跡					○		



第2図 新留上遺跡調査区設定図（坂東市都市計画図 2500 分の 1 から作成）

第3章 新溜上遺跡

第1節 調査の概要

新溜上遺跡は、坂東市の北部に位置し、江川左岸の標高16～17mの台地縁部に立地している。遺跡の範囲は、遺構の配置や周辺の地形などから、今回の調査範囲から南側へ広がるものと推測される。調査面積は7,660㎡で、調査前の現況は山林・畑地である。

調査の結果、竪穴建物跡5棟（古墳時代）、竪穴遺構1基（古墳時代）、土坑80基（縄文時代4、時期不明76）、溝跡7条（時期不明）、竪跡2基（縄文時代、時期不明）、石器出土地点1か所（旧石器時代）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に20箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢・鉢・浅鉢）、土師器（罎・高坏・小形壺・壺・台付甕・甕・甗）、土製品（土玉・支脚）、石器（ナイフ形石器・鎌・打製石斧・石皿・敲石）、石核、剥片などである。

第2節 基本層序

調査区中央部の台地上の平坦面（D 5a9区）にテストピットを設定して基本土層の観察を行った。

第1層は、暗褐色を呈する耕作土である。層厚は20～30cmである。

第2層は、褐色を呈するローム漸移層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は最大15cmである。

第3層は、褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は最大10cmである。

第4層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は10cmである。

第5層は、暗褐色を呈するハードローム層である。炭化物粒子を微量に含み、粘性・締まりともに強く、層厚は15～35cmである。色調から第2黒色帯上部と考えられる。

第6層は、暗褐色を呈するハードローム層である。粘性は強く、締まりは普通で、層厚は12～21cmである。第2黒色帯下部と考えられる。

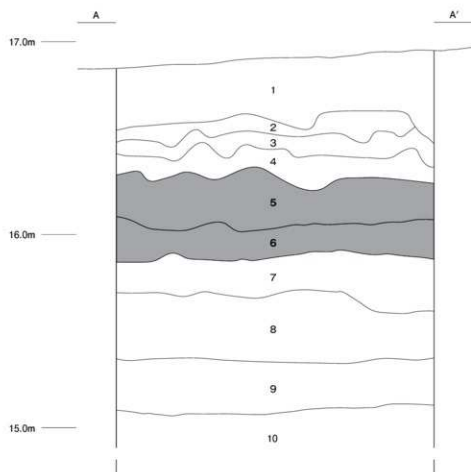
第7層は、ぶい褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は15～30cmである。

第8層は、ぶい褐色を呈するハードローム層である。酸化した鉄分を含み、粘性・締まりともに強く、層厚は22～37cmである。

第9層は、明褐色を呈するハードローム層である。酸化した鉄分を多量に含み、粘性・締まりともに強く、層厚は22～26cmである。

第10層は、明褐色を呈する常総粘土層である。酸化した鉄分を多量に含み、粘性は強く、締まりは普通である。層厚は24cmまで確認したが、下部は未掘のため不明である。

遺構は、第3層の上面で確認した。



第3图 基本土层图

第3節 遺構と遺物

1 旧石器時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、石器出土地点1か所を確認した。第3号竪穴建物跡及び第4号竪穴建物跡の覆土中から旧石器時代の石器が出土したため、E5a2・E5a4・E5b3・E5b5・E5c2・E5c4に調査区を設定し、基本土層の第3層から第5層上面まで掘り下げた。以下、石器出土地点及び出土石器について記述し、第3号竪穴建物跡出土の旧石器時代遺物について実測図と観察表で記載する。

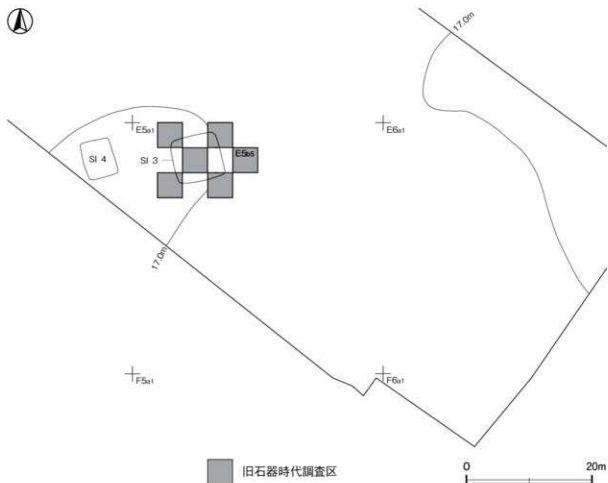
石器出土地点

第1号石器出土地点（第4～6図）

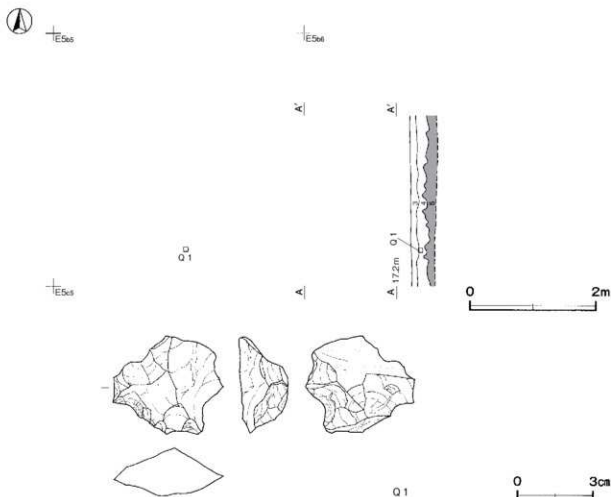
位置 調査区中央部のE5b5区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

遺物出土状況 石核1点が、基本土層の第4層（ハードルーム層）から出土している。石材は、頁岩である。また、第3号竪穴建物跡覆土中から7点、第4号竪穴建物跡覆土中から2点、旧石器時代の石器が出土している。

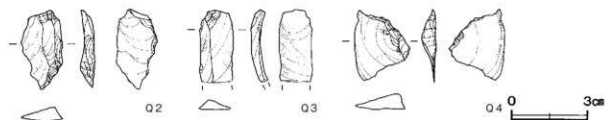
所見 時期は、出土層位から後期旧石器時代後半に比定できる。



第4図 旧石器時代調査区設定図



第5図 第1号石器出土地点・出土遺物実測図



第6図 第3号竪穴建物跡出土旧石器時代遺物実測図

第1号石器出土地点出土遺物観察表（第5・6図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	石核	3.9	4.3	1.9	24.2	頁岩	自然面残存	E 5b5	PL. 8
Q 2	サイフ形石片	3.1	1.7	0.6	2.7	チャート	部分的な二側縁加工	SI 3 層土中	PL. 8
Q 3	湖片	(2.9)	1.3	0.6	(1.6)	黒曜石	縦長湖片	SI 3 層土中	PL. 8
Q 4	湖片	2.8	2.2	0.6	2.2	黒曜石	一部使用痕	SI 3 層土中	PL. 8

2 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、炉跡1基、土坑4基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 炉跡

第1号炉跡（第7図）

位置 調査区北部のD4a8区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径1.06m、短径0.98mの円形で、深さ18cmの地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられ、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

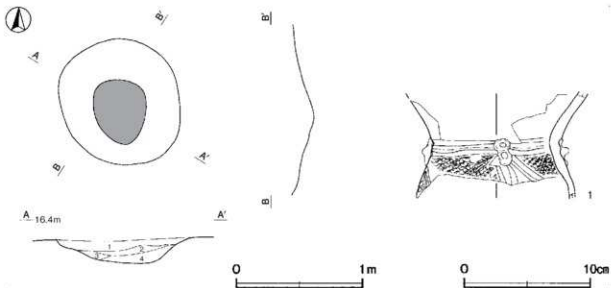
覆土 4層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片20点（深鉢）、粘土塊6点が出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前葉（堀之内1式期）に比定できる。



第7図 第1号炉跡・出土遺物実測図

第1号炉跡出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	變成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(8.4)	-	長石・石英・準砂粒子	にじみ滑	普通	L京縄文→沈縄文・縄文滑浜→8の字伏貼付文		覆土中	10%

(2) 土坑

第70号土坑（第8図）

位置 調査区北部のD4a2区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径1.33m、短径1.13mの楕円形で、長径方向はN-90°-Eである。深さ48cm、底面はほぼ平坦で、壁は外傾している。

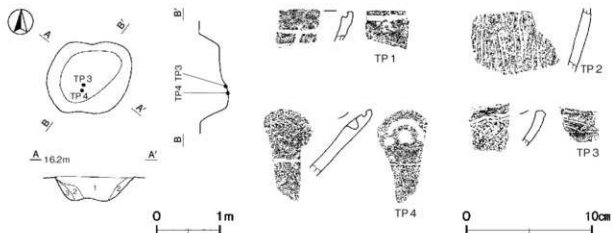
覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
2 暗褐色 ロームブロック少量
3 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片 82点（深鉢 80、鉢 1、浅鉢 1）、粘土塊 6点が出土している。TP 3・TP 4は底面から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前葉（堀之内1式期）に比定できる。



第8図 第70号土坑・出土遺物実測図

第70号土坑出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	口縁部外・内面横位の沈線	覆土中	
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	3本一単位の平行短沈線	覆土中	
TP 3	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	縦やかな波状口縁 LRの無節縄文→沈線文	底面	
TP 4	縄文土器	浅鉢	長石・石英	にぶい黄橙	口縁部小波状部 内面短沈線と刺突	底面	

第73号土坑（第9図）

位置 調査区北部のC 4 h3区、標高 16 mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径0.66 m、短径0.51 mの楕円形で、長径方向はN-34°-Eである。深さは30 cm、底面は平坦で、壁は外傾している。

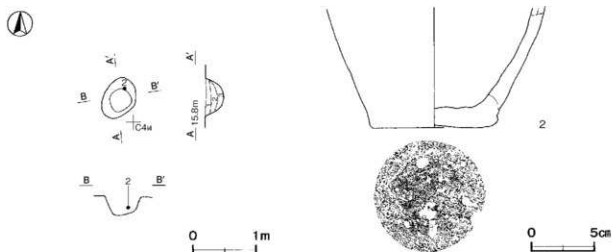
覆土 3層に分層できる。各層ともローム粒子が均一に含まれており、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
2 黒褐色 ローム粒子中量
3 褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 縄文土器片 5点（深鉢）が出土している。2は覆土中層から、斜位で出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前葉（堀之内1式期）に比定できる。



第9図 第73号土坑・出土遺物実測図

第73号土坑出土遺物観察表(第9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	—	9.5	8.8	長石・石英・磁石	淡黄橙	普通	無文 外周へう刷り	覆土中層	30% PL. 8

第76号土坑(第10図)

位置 調査区南部のE5d9区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 規模は、北東・南西径は0.96m、北西・南東径は0.72mしか確認できなかった。北東・南西径方向はN-61°-Eで、形状は不整楕円形と推定できる。深さは14cm、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

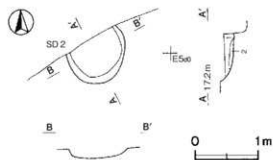
覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることや堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 細片のため図示できないが、縄文土器片5点(深鉢)が出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前葉(堀之内式期)に比定できる。



第10図 第76号土坑実測図

第78号土坑(第11図)

位置 調査区北部のD4a2区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 大半が覆乱を受けているため、規模や形状は不明である。残存部の形状から、径0.6mほどの円形であると推定できる。深さは29cm、底面は皿状で、壁は外傾している。

覆土 2層に分層できる。混入物が少なく周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

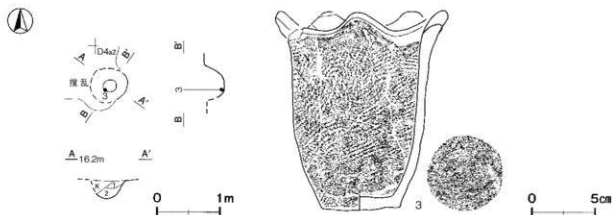
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子微量

2 極暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 縄文土器1点(深鉢)が出土している。

所見 時期は、出土土器から後期中葉(加曾利B式期)に比定できる。ほぼ完形の土器が底面から出土していることから、土器埋設土坑と考えられる。



第11図 第78号土坑・出土遺物実測図

第78号土坑出土遺物観察表(第11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
3	縄文土器	深鉢	130	158	61	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	5単位の深状口縁 胴部0段3条1区縄文→下部ヘラ削り	底面	90% PL 8

表2 縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	外面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (cm)	深さ (cm)					
70	D 4 a2	N - 90° - E	楕円形	133 × 113	48	平坦	外傾	人為	縄文土器	
73	C 4 b3	N - 34° - E	楕円形	0.66 × 0.51	30	平坦	外傾	自然	縄文土器	
76	E 5 a9	N - 61° - E	[不整形円形]	0.96 × (0.72)	14	平坦	縦斜	人為	縄文土器	本跡→SD 2
78	D 4 a2	-	[円形]	[0.57 × 0.56]	29	凹状	外傾	自然	縄文土器	

3 古墳時代の遺構と遺物

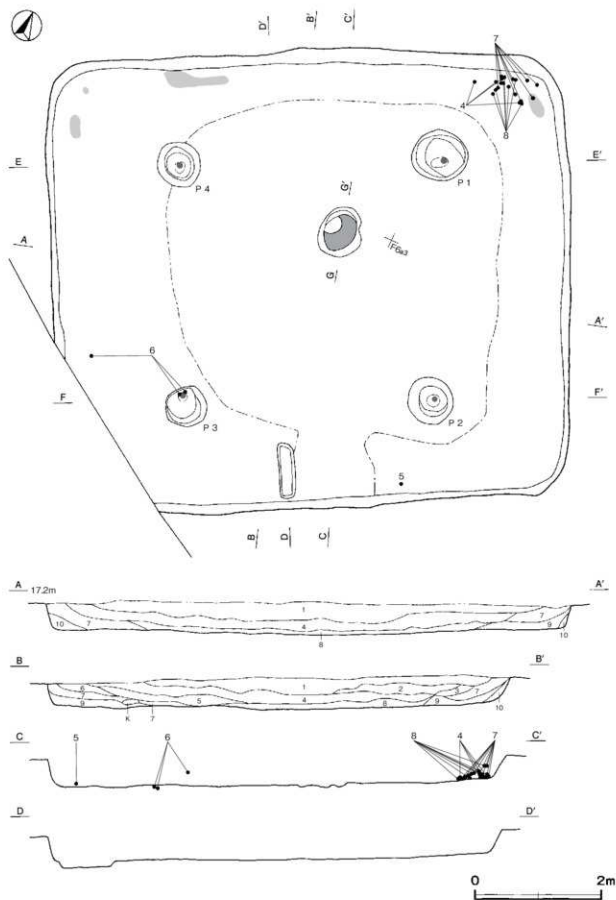
当時代の遺構は、堅穴建物跡5棟、堅穴遺構1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 堅穴建物跡

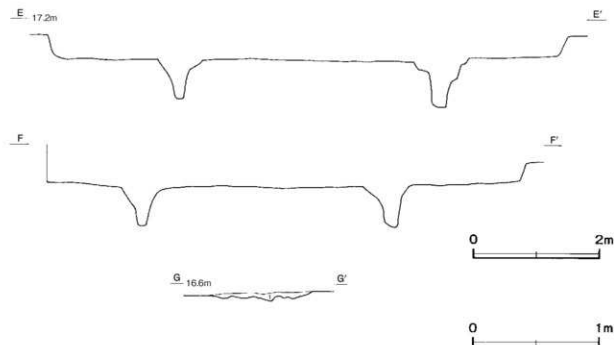
第1号堅穴建物跡(第12～14図)

位置 調査区南部のF 6 a2区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸8.26m、短軸7.28mの長方形で、主軸方向はN - 26° - Wである。壁は高さ30～50cmで、ほぼ直立している。



第12图 第1号竖穴建物跡实测图(1)



第13図 第1号竪穴建物跡実測図(2)

床 平坦で、中央部から南壁際まで踏み固められている。南壁際中央部に、長さ88cm、幅24cm、深さ10cmで、断面が浅いU字状の溝1条を確認した。出入り口施設に伴う溝の可能性はある。

炉 中央部やや北東寄りに位置している。長径80cm、短径69cmの楕円形で、床面を7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量

ピット 4か所。P1～P4は深さ62～78cmで、規模と配置から支柱穴である。4か所ともに柱あたりを確認しており、直径10cm程度の柱材と推定できる。

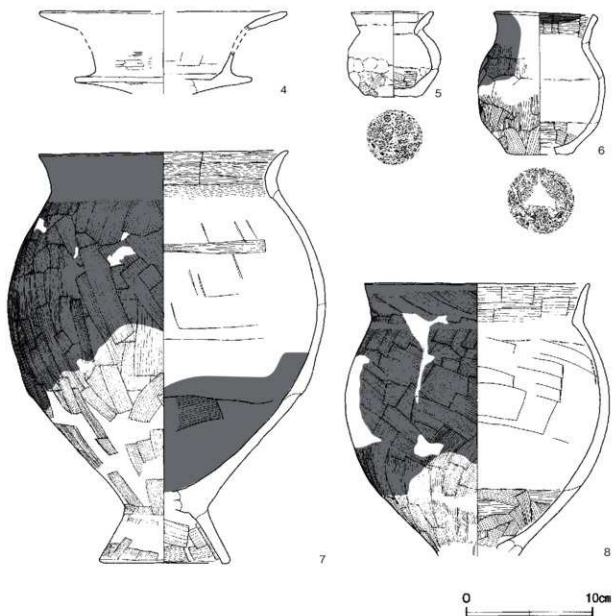
覆土 10層に分層できる。第10層は壁際からの崩落土で、第3・5～9層は廃絶後に埋め戻された層で、その後、第1・2・4層が自然堆積したものと考えられる。北壁沿いに焼土を確認しているが、小範囲であり、炭化材も出土していないことから、埋め戻された土に含まれていたものと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|--------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 6 極暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | 7 褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 9 褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子中量 | 10 明褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片385点(器台3、高坏14、高坏類1、鉢類7、小形壺2、台付甕3、甕19、甕類336)、土製品1点(支脚)、粘土塊2点が、覆土上層から床面にかけて全域に散在した状態で出土している。5はほぼ完形で、南壁際の床面から横位で出土していることから、廃絶時に遺棄されたものとみられる。6は南西部から、4・7・8は、北東コーナーから出土した破片がそれぞれ接合したもので、建物廃絶後の埋め戻しの際に投棄されたものと考えられる。6は、底部を穿孔するために、意図的に力を加えたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から4世紀前葉に比定できる。



第14図 第1号竪穴建物跡出土遺物実測図

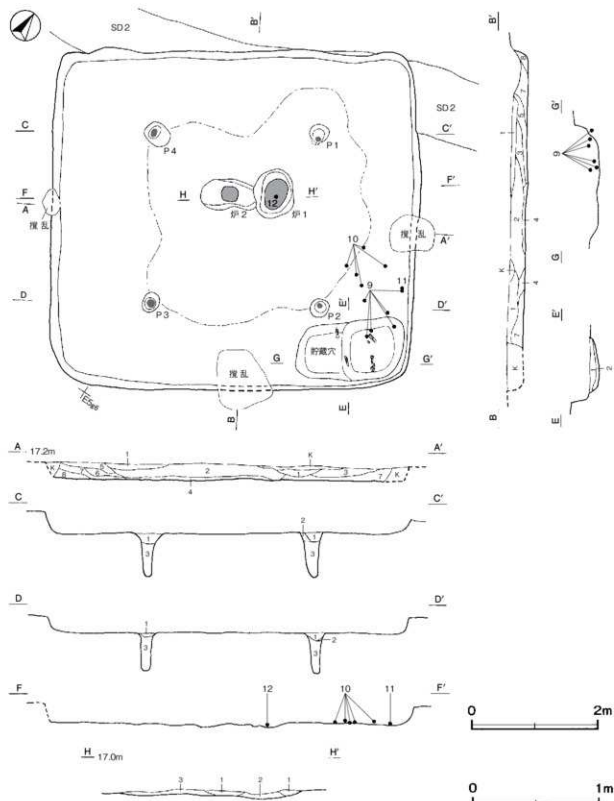
第1号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径・底径径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
4	土師器	器台	[196]	(6.5)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面ハケ目後ヘラ磨き 内面ヘラナデ	覆土下層	10%
5	土師器	小形壺	6.3	6.7	4.5	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下位内面ハケ目→接合後上位ナデ 外面ハケ目→口縁ナデ 口縁部接合→外面横ナデ内面ヘラナデ	床面	95% PL.5 保存者
6	土師器	小形壺	7.5	11.3	5.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下位内面ハケ目→接合後上位ナデ 外面ハケ目→口縁→胴部横ナデ 口縁部ヘラナデによる面取り、底窓穿孔	覆土下層	70% PL.5 保存者
7	土師器	台付壺	19.7	32.5	10.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部下位内面ハケ目→上位接合後下位ナデ・口縁→上位ヘラナデ 胴部内面ハケ目→ヘラナデ 外面全体ハケ目→口縁→胴部横ナデ 口縁部内面横段のヘラナデ→体部上位と接合→胴部内面ナデ→体部下位内面ヘラナデ 体部下位内面ハケ目→上位と接合 外面全体ハケ目→口縁部斜位のハケ目→口縁部・胴部横ナデ	覆土下層	70% PL.6 保存者 片面貼付
8	土師器	台付壺	17.8	(21.5)	-	長石・石英・赤色粒子	靑灰	普通		覆土下層	60% 保存者

第2号竖穴建物跡 (第15・16図)

位置 調査区南部のE5f6区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第2号溝に掘り込まれている。



第15図 第2号竖穴建物跡実測図

規模と形状 長軸5.82 m、短軸5.34 mの方形で、主軸方向はN-32°-Wである。壁は高さ22～30cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、主柱穴の内側を中心として、炉の周囲が踏み固められている。

炉 2か所。炉1は中央部やや東寄りに位置しており、長径80cm、短径69cmの楕円形で、床面を6cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。炉2はほぼ中央部に位置しており、長径84cm、短径48cmの楕円形で、床面を4cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉2の炉床面は、ほとんど火熱を受けておらず、短期間しか使用されていない。炉1・炉2の覆土は、合わせて3層に分層できる。堆積状況や炉床面の火熱の受け方から、炉2はほとんど使用されずに埋め戻され、その後、建物の廃絶まで炉1が使用されたと考えられる。炉1の覆土中から12が立位で出土している。

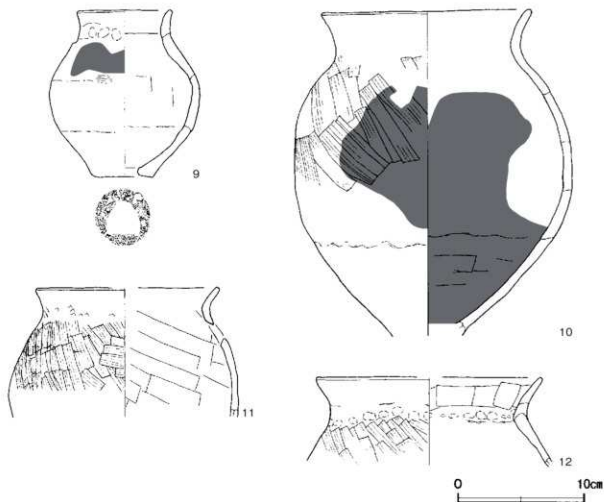
炉土層解説

- | | |
|------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量 | 3 極暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒子微量 | |

ピット 4か所。P1～P4は深さ63～69cmで、規模と配置から主柱穴である。3層に分層でき、第3層は締まりの弱い黒褐色土で、柱痕跡と考えられる。柱痕跡と柱あたりから、直径15cm程度の柱材と推定できる。

ピット土層解説

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 3 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 2 褐色 ローム粒子中量 | |



第16図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図

貯蔵穴 南壁沿いの東寄りに位置しており、長軸164cm、短軸97cm、深さ16cmの長方形でテラス状の段を有する形状である。覆土は2層に分層でき、第1層下部から炭化材が出土している。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化材・焼土粒子微量 2 褐色 ローム粒子少量

覆土 8層に分層できる。第8層は壁際からの崩落土で、その他は埋め戻された層である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量 5 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
2 黒褐色 ローム粒子少量 6 黒褐色 ロームブロック中量
3 褐色 ローム粒子中量 7 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 8 明褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片224点（器台1、高坏1、高坏類2、壺3、小形壺1、台付甕6、甕2、甕類208）のほか、縄文土器片2点（深鉢）が覆土土層から床面にかけて全域に散在した状態で出土している。9～11は東壁貯蔵穴付近の床土から出土している。11は、頭部下に2か所の穿孔がなされたもので、壁際の床土に据え置かれた状態で出土している（P.L.2）。9は、床面・貯蔵穴の覆土下層から出土した破片が接合したもので、底部に穿孔されている。

所見 時期は、出土土器から4世紀前葉に比定できる。床面から出土している穿孔された土器は、堅穴建物廃絶に際しての祭祀行為に関わるものと考えられる。

第2号堅穴建物跡出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径・器底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
9	土師器	小形壺	72	132	45	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ハケ目横ナデ・内面ヘラナデ 口縁部横ナデ後頭部指頭押圧 底部外側から穿孔	床面 貯蔵穴覆土 上層～下層	80% PL.3 保存者 焼熟して急冷 30% PL.4 保存者 内面灰け 指頭残れ
10	土師器	台付甕	164	(257)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面磨面状工具によるヘラナデ 口縁部横ナデ 体部内面ヘラナデ	床面	40%
11	土師器	甕	142	(102)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面磨面状工具によるヘラナデ 体部内面ヘラナデ→口縁部外・内面横ナデ 頭部下に外から穿孔（1ヶ所） 体部磨面状工具によるヘラナデ 口縁部外面横ナデ・内面ヘラナデ→口縁部種合後頭部ナデ・指頭押圧	床面	30%
12	土師器	甕	180	(70)	-	長石・石英	明赤褐	普通		伊1覆土内	20% 砂面荒れ 焼熟して急冷

第3号堅穴建物跡（第17～21図）

位置 調査区中央部のE5b3区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

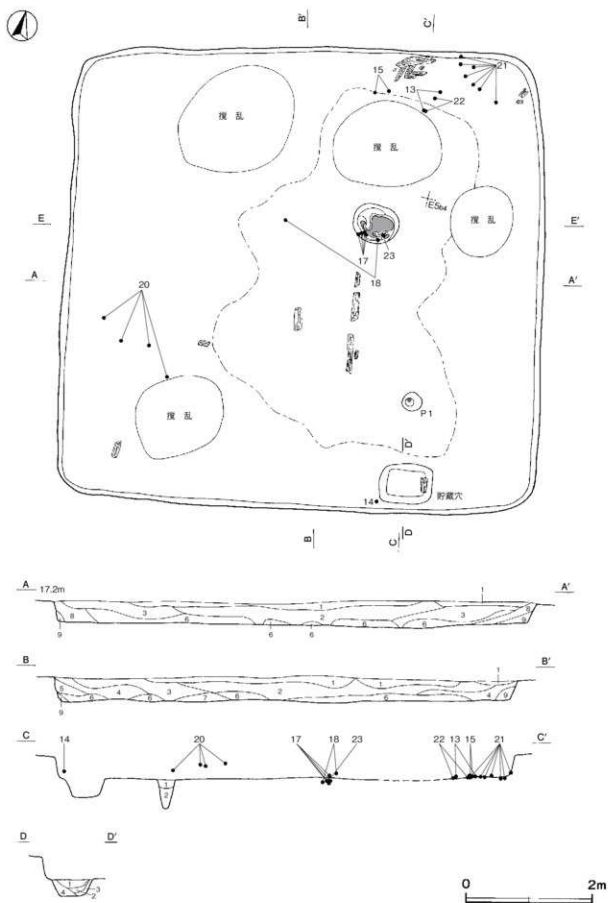
規模と形状 長軸765m、短軸727mの方形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁は高さ30～35cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

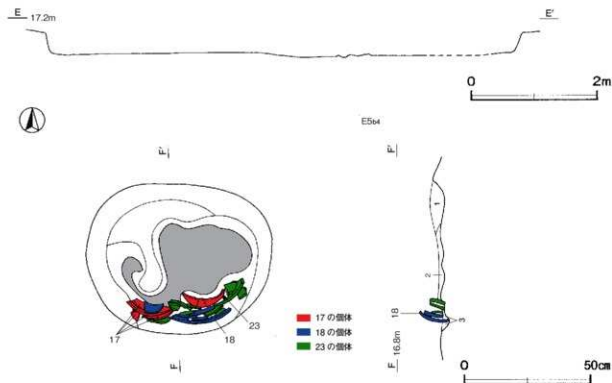
炉 中央部やや北東寄りに位置しており、形状は長径74cm、短径61cmの楕円形で、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。床面をそのまま使用した地床炉であるが、南側に土器片を突き立てて全局の3分の1ほどの覆いを設置しており、ある種の土器囲炉とも呼べる。炉の縁辺に突き立てていた土器片の接合状況と個体識別を行ったところ、3個体の土器片が使用されているが、接合状況は極めて悪いことが確認できた。おそらく、利用できなくなった土器で、使用に耐えうる大きさの破片のみを使用して、残りは別の場所に廃棄したものである。17・18・23は、これらの土器片のうち、一番大きな破片を抽出して図化したものである。なお、今回の調査区域内で遺構間接合も試みたが、接合できる資料は見つからなかった。

炉土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子微量 3 黒褐色 ロームブロック微量
2 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子微量



第17图 第3号竖穴建物跡实测图(1)



第18図 第3号竪穴建物跡実測図(2)

ピット P1は深さ46cmで、規模と配置から主柱穴である。2層に分層でき、第2層は締まりの弱い黒褐色土で、柱痕跡と考えられる。P1の配置から、ほかに3か所主柱穴があることが想定されるが、後世の攪乱により確認できなかった。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|---------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 2 黒褐色 | ローム粒子微量 |
|-------|----------------|-------|---------|

貯蔵穴 南壁沿いの東寄りに位置しており、長軸85cm、短軸63cmの長方形で、深さは26cmである。覆土内に焼土ブロックが含まれており、底面から炭化材が出土していることから、建物の焼失時には開口している。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 3 暗褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック少量 |

覆土 9層に分層できる。第8・9層は壁際からの崩落土で、建物の焼失前に堆積している。その後、第7層をばさみ、建物の焼失時に焼土と炭化材が含まれる第6層が形成される。ここに含まれる炭化材は、上屋の構造材が焼け落ちたものと考えられる。その後、人為的に埋め戻されている。

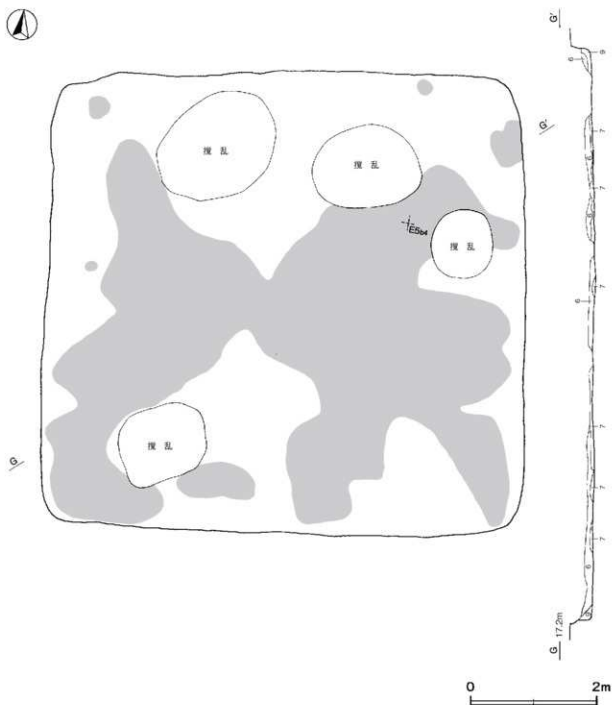
土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 6 黒褐色 | 炭化粒子多量、焼土ブロック・ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化物微量 | 8 褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 | | |

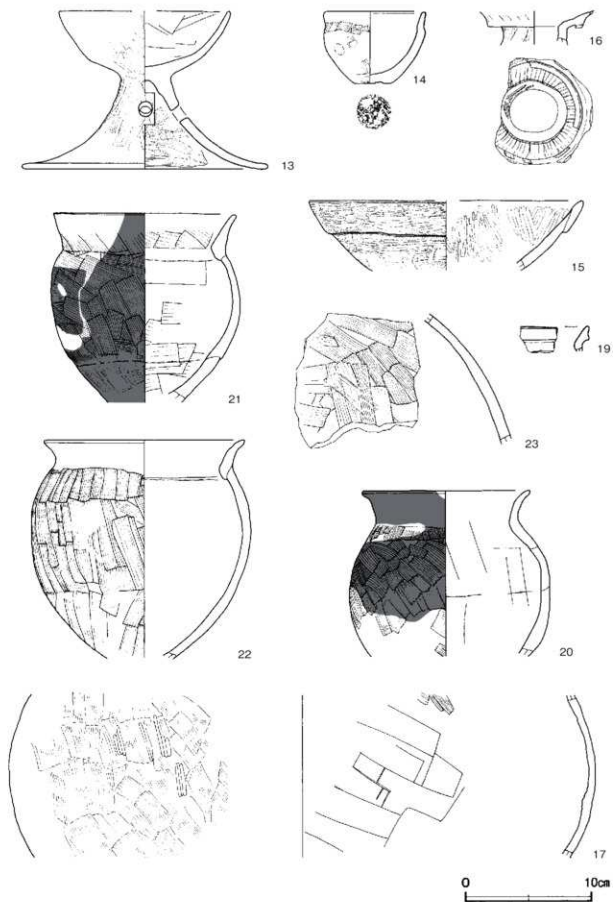
遺物出土状況 土師器片650点(高坏11, 高坏類1, 鉢1, 鉢類2, 壺5, 台付甕4, 甕4, 甕類622), 土製品1点(土玉)のほか、縄文土器片238点(深鉢), 石器3点(ナイフ形石器, 打製石斧, 敲石), 剥片6点, 軽石1点, 粘土塊22点が覆土上層から床面にかけて、全域に散在した状態で出土している。13は、北東部の床面から出土した破片が接合したものである。21・22は、北東部の床面および覆土中から出土した破片がそ

れぞれ接合したものである。どちらも火熱を受けているが、接合状況から、21は本跡焼失前に破片の状態
 で投棄されたと考えられる。14・15は覆土下層からの出土である。14は貯蔵穴付近の壁際の崩落土中から横位
 で出土した。火熱を受けており、焼失前に置かれたものと判断できる。20は、南西部で焼土層より上層の埋
 め戻された層から出土している。埋め戻し時に混入または投棄されたものと考えられる。

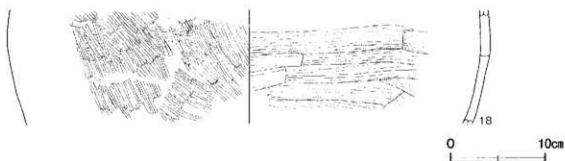
所見 時期は、出土土器から4世紀前葉に比定できる。炭化材の出土や、建物跡全域に広がる焼土から、焼失
 建物と判断できる。



第19図 第3号竪穴建物跡実測図(3)



第20图 第3号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第21図 第3号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第3号竪穴建物跡出土遺物観察表(第20・21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径・ 取付径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
13	土師器	高坏	[135]	125	[192]	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	外部外面ハケ目後ヘラ磨き 脚部下層ナデ 内部内面ハケ目後ヘラ磨き 脚部上層ナデ	床面	70% PL.5
14	土師器	鉢	8.0	5.7	2.8	長石・石英	橙	普通	外面ハケ目後ナデ 内部内面ナデ 口縁部内面横ナデ	覆土下層	100% PL.5 表面荒れ 5% 炭灰
15	土師器	壺	[218]	(3.5)	-	長石・石英	黒	普通	外面口縁折返し→ハケ目後横位のヘラ磨き 内面ハケ目後縦位のヘラ磨き 轆	覆土下層	30%
16	土師器	壺	-	(2.7)	-	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	外面ハケ目 口縁下部縁帯貼付後ナデ 頸部縦外面に横み	覆土中	10%
17	土師器	壺	-	(128)	-	長石・石英	橙	普通	外部外面ハケ目後ヘラ磨き 内面ハケ目 ヘラナデ	炉縁辺	20% 炭灰 表面荒れ 炉に使用
18	土師器	壺	-	(120)	-	長石・石英	明褐色	普通	外部外面ハケ目後ヘラ磨き 内面ヘラナデ	炉縁辺	10% 炭灰 表面荒れ 炉に使用
19	土師器	台付壺	-	(2.0)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	覆土中	5%
20	土師器	甕	129	(13.2)	-	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	外部外面ハケ目内面縦位のヘラナデ→口縁部外・内面横ナデ	覆土中層	70% 灰分含有
21	土師器	甕	142	(15.1)	-	長石・石英・ 赤色粒子	浅黄褐色	普通	外部上下縁→外面ハケ目後横帯貼付ナデ 内面ヘラナデ 口縁部横合→外部外・内面縦位のヘラナデ後横ナデ 体部上位急上げ彫形 内面非鉛直	床面 覆土下層	20% 縦帯後縁熱 帯含有
22	土師器	甕	160	(17.3)	-	長石・石英・ 細粒	赤褐色	普通	外部外面ハケ目後縦位のヘラナデ→口縁部外・内面横ナデ	床面上下層	60% 5% 炭灰 5% 灰分含有して赤化 内面黄褐色
23	土師器	甕	-	(10.6)	-	長石・石英	明褐色	普通	外部外面ハケ目	炉縁辺	20% 炭灰 表面荒れ 炉に使用

第4号竪穴建物跡(第22・23図)

位置 調査区中央部のE4b9区。標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸6.18m、短軸5.08mの長方形で、主軸方向はN-15°-Wである。壁は高さ20~31cmで、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部やや東寄りに位置している。長径110cm、短径98cmの不整形円形で、床面を8cmほど掘りこぼめた地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|----------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 3 赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒子微量 | 4 極暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 |

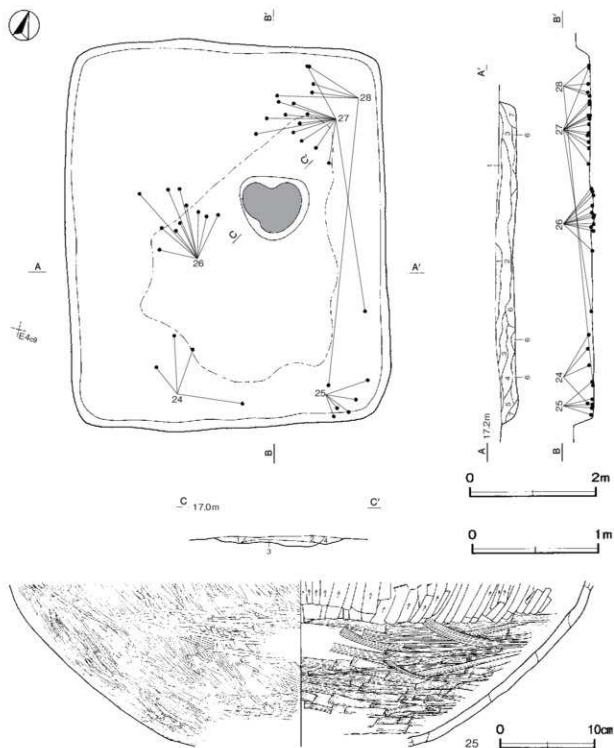
覆土 7層に分層できる。混入物や遺物の出土状況等から判断して、埋め戻されている。

土層解説

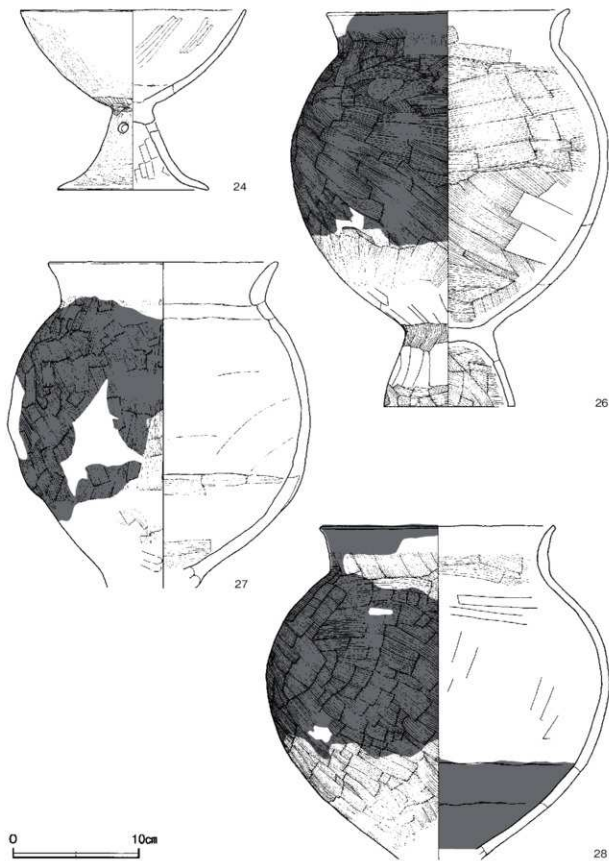
- | | |
|-----------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子中量 | 5 暗褐色 ロームブロック微量 |
| 2 極暗褐色 ローム粒子多量 | 6 黒褐色 ローム粒子多量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量 | 7 暗褐色 ローム粒子多量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 | |

遺物出土状況 土師器片 126 点（高坏 9，壺 1，台付甕 3，甕 3，甕類 110）のほか、縄文土器片 27 点（深鉢）、剥片 2 点、粘土塊 7 点が覆土上層から床面にかけて全域に散在した状態で出土している。26～28 は、床面から出土した破片がそれぞれ接合したものである。それぞれが一定の範囲内に破片で散在している状況から、廃絶時に建物内で破壊し遺棄したものと考えられる。24・25 は、覆土下層からの出土で、それぞれ埋設過程において投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀前葉に比定できる。



第 22 図 第 4 号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第23图 第4号竖穴建物跡出土遺物実測図

第4号竪穴建物跡出土遺物観察表(第22・23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径・ 胴部径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
24	土師器	高坏	178	143	118	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	頸部ハケ目後ナデ→脚部外面・耳部外・内面ハ ケ目・脚部内面横位のヘラナデ 脚部3意 未定意	覆土下層	60% PL 5
25	土師器	壺	-	(175)	-	長石・石英・ 赤色粒子	黒褐	良好	体部外面ハケ目後ヘラナデ 体部内面横位のハ ケ目→接合後ナデ・底位のヘラナデ	覆土下層	10%
26	土師器	台付甕	191	313	104	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	頸部内面ハケ目・外面ヘラナデ→下層ハケ目 体部外・内面ハケ目後ヘラナデ→脚部接合部外 面ハケ目 口縁部横ナデ	床面	90% PL 6 塚付着
27	土師器	台付甕	178	(257)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部下位外・内面ハケ目→外面接合部ナデ→体部 上位外面ハケ目 内面ヘラナデ 口縁部横ナデ	床面	70% PL 6 塚付着 炭灰 器面黒れ
28	土師器	甕	185	(263)	-	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面斜位のハケ目→胴部縦位のハケ目 体 部内面ヘラナデ→頸部ハケ目 口縁部横ナデ 輪積み直	床面	80% PL 6 塚付着 内部黒れ

第5号竪穴建物跡(第24・25図)

位置 調査区北部のD 4b4区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸5.14m、短軸4.56mの長方形で、主軸方向はN-33°-Wである。壁は高さ13~26cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。少量だが、焼土や炭化物が床面に散在している。

炉 中央部やや東寄りに位置している。径46cmほどの円形で、床面を6cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

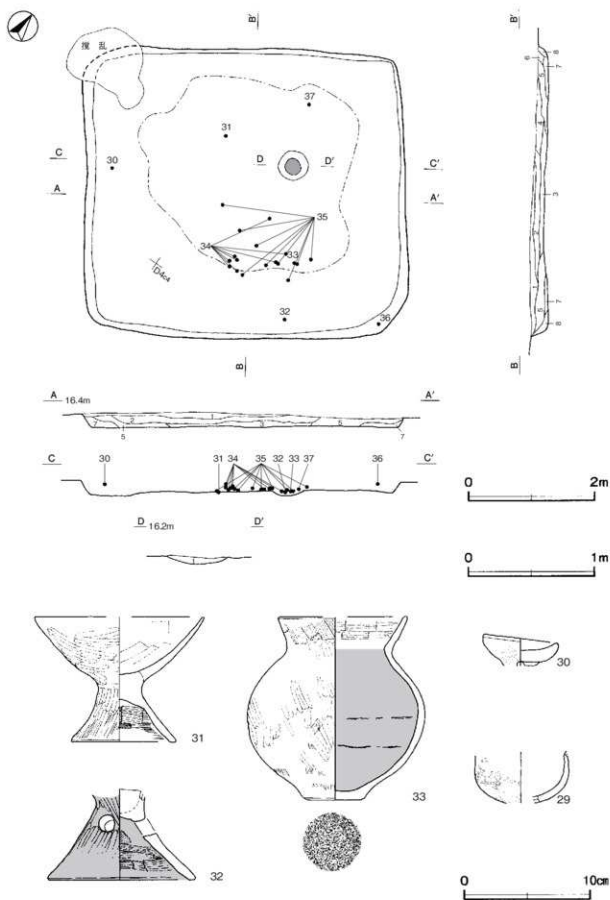
覆土 8層に分層できる。堆積状況や遺物の出土状況等から判断して、埋め戻されている。

土層解説

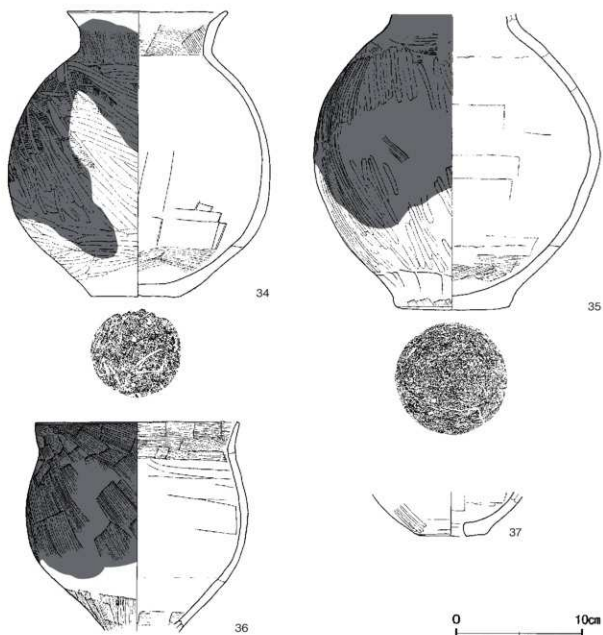
- | | | | |
|-------|------------------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 6 赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 | 7 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック少量 | 8 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片393点(埴1、器台1、高坏2、壺3、小形壺1、台付甕2、甕38、甕類344、瓶1)のほか、縄文土器片303点(深鉢)、須恵器片1点(坏)、石器2点(石皿)、粘土塊15点が、覆土上層から床面にかけて全域に散在した状態で出土している。29は精製の埴の破片で、床面からの出土である。31~33は、床面から横位で出土しており、廃絶時に遺棄されたものと考えられる。34・35は、床面から覆土下層にかけて出土した破片がそれぞれ接合したものである。接合状況から、それぞれ胴部に対して横からの力が働いて破損したものと考えられる。また、一定の範囲内に破片で散在している状況から、廃絶時に建物内で破壊し遺棄したのと考えられる。また、接合した破片の出土層位から、この行為は埋め戻しの開始時または開始直後に行われたことが推測できる。30・36・37は、出土層位から、埋め戻しが行われている途中または埋め戻し後に投棄されたものと考えられる。36は横位の潰れた状態で出土した。

所見 出土土器から第1~4号竪穴建物に後続する時期であると想定でき、4世紀前半に比定できる。34・35は、横位の状態でも床面に叩きつけて破壊した可能性があり、壺を意図的に破砕した行為は、建物の埋め戻しに伴う祭祀行為として行われたと考えられる。



第24图 第5号竖穴建物跡・出土遺物实测图



第25図 第5号竪穴建物跡出土遺物実測図

第5号竪穴建物跡出土遺物観察表(第24・25図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径・器高比	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
29	土師器	埴	-	(41)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤黄	普通	体部外面ハケ目後ヘラ磨き 内面横ナデ	床面	23%
30	土師器	器台	5.8	(25)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面ハケ目調整後ヘラ磨き 頸部に十字の穿孔 赤彩痕	覆土中層	10%
31	土師器	高杯	[13.3]	9.9	8.1	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面ハケ目後ヘラ磨き 坏部内面ヘラナデ 脚部内面横段のハケ目後ナデ 赤彩痕	床面	70% PL.5 器面裏れ
32	土師器	高杯	-	(7.2)	11.2	長石・石英・赤色	橙	普通	外縁磨き 内面ハケ目→下縁横ナデ ソケット状に坏部結合 脚部3葉 外・内面赤彩	床面	50%
33	土師器	小形壺	[10.0]	14.5	4.3	長石・石英・赤色	橙	普通	体部外面ハケ目後ヘラ磨き 口縁部外・内面ヘラナデ 内面赤彩	床面	90% PL.5 器面裏れ
34	土師器	壺	12.6	22.6	7.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面ハケ目後ヘラ磨き 体部内面下位ハケ目→接合部ヘラナデ 口縁部横ナデ	床面 覆土下層	90% PL.5 裏面裏れ 裏面裏れ 後縁後縁熟
35	土師器	壺	-	(23.3)	9.0	長石・石英	にぶい橙	普通	体部内面下位ハケ目→接合後内面ヘラナデ 体部外面ハケ目→下位調整のヘラナデヘラ磨き	床面 覆土下層	87% 84% 裏面裏れ
36	土師器	台付壺	1.60	(16.7)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面調整のハケ目→接合部ナデ 口縁部内面細い金網のヘラナデ 体部内面下層ハケ目→体部内面ヘラナデ	覆土下層	87% 裏面裏れ
37	土師器	瓶	-	(3.6)	5.6	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	外面ヘラ磨き ナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	10% 器面裏れ

表3 古墳時代堅穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
								柱穴	土口	ピット	竪穴	石				
1	F 6 a2	N-25°-W	長方形	8.26×7.28	30~50	平坦	-	4	1	-	1	-	自然 人為	土師器、土製品	4世紀前半	
2	E 5 b5	N-32°-W	方形	5.82×5.34	22~30	平坦	-	4	-	-	2	1	自然 人為	土師器	4世紀前半	本跡→SD 2
3	E 5 b3	N-30°-W	方形	7.65×7.27	30~35	平坦	-	1	-	-	1	1	人為	土師器、土製品	4世紀前半	
4	E 4 b9	N-15°-W	長方形	6.18×5.08	20~31	平坦	-	-	-	-	1	-	人為	土師器	4世紀前半	
5	D 4 b4	N-33°-W	長方形	5.14×4.56	13~26	平坦	-	-	-	-	1	-	人為	土師器	4世紀前半	

(2) 堅穴遺構

第1号堅穴遺構 (第26図)

位置 調査区北部のD 4 f2区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 南西部が調査区域外へ伸びているため、北西・南東軸は3.40mで、北東・南西軸は0.85mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定でき、長軸方向はN-45°-Wである。深さは21cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾している。

覆土 2層に分層できる。各層にロームブロック・粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

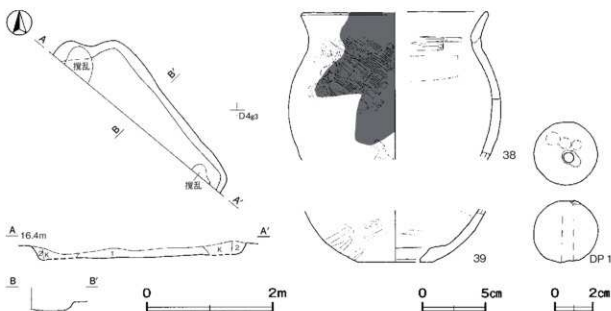
土層解説

1 褐色 ロームブロック中量

2 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片20点(高坏類1、甕1、甕類17、瓶1)、土製品1点(土玉)が出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前半に比定できる。堅穴建物跡の可能性がある。



第26図 第1号堅穴遺構・出土遺物実測図

第1号堅穴遺構出土遺物観察表 (第26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
38	土師器	甕	(146)	(11.7)	-	長石・石英・ 赤色粘土	にぶい橙	普通	口縁部溝ナシ 体部内面ハケ目 器内面ヘラナシ 指盛肌	體 内面ハケ目	覆土中 10% 埋込層
39	土師器	瓶	-	(4.1)	(6.0)	長石・石英	橙	普通	外面ヘラ磨き 内面ヘラナシ		覆土中 10% 器面散れ

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
DP 1	土玉	3.3~3.4	3.3	0.5~0.6	349	長石・石英	橙	ナデ 密頭痕 一方向からの穿孔	覆土中	

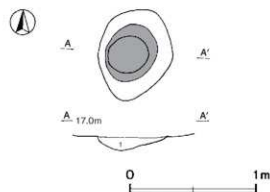
4 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明確でない炉跡1基、土坑76基、溝跡7条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 炉跡

第2号炉跡（第27図）

位置 調査区中央部のD5j0区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。



第27図 第2号炉跡実測図

規模と形状 長径0.74m、短径0.58mの楕円形で、長径方向はN-15°-Eである。深さは10cmで、皿状の地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 燃焼に伴う焼土や炭化粒子を含む単一層である。

土層解説

I 暗褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量

所見 出土遺物がなく、第1号炉跡との関連性もみられないため、時期は不明である。

(2) 土坑

土坑については、規模・形状等について遺構全体図（第34図）と一覧表で掲載する。

表4 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	F 6 a5	-	円形	1.01 × 0.95	10	平坦	緩斜	自然	土層部	
2	E 6 j7	-	円形	0.82 × 0.78	16	平坦	緩斜	自然		
3	E 6 i5	N-87°-W	楕円形	0.84 × 0.64	10	平坦	外傾	人為		
4	E 6 h4	-	円形	0.56	13	平坦	外傾	人為		
5	E 6 g3	N-37°-W	楕円形	1.06 × 0.94	14	平坦	緩斜	自然		
6	E 6 g1	N-83°-E	楕円形	0.70 × 0.63	12	平坦	緩斜	人為		
7	E 5 d9	N-85°-W	不定形	0.76 × 0.61	23	平坦	緩斜	人為		
8	E 5 d9	-	[円形]	0.55 × [0.51]	39	皿状	外傾	自然		
9	E 5 h8	N-74°-E	楕円形	0.87 × 0.77	35	平坦	外傾	人為	縄文土器、土層部	
10	E 5 d1	N-3°-E	楕円形	0.57 × 0.46	15	皿状	緩斜	自然		
11	E 5 d9	N-0°	楕円形	0.84 × 0.58	18	皿状	緩斜	自然		
12	F 6 a5	N-40°-W	楕円形	0.70 × 0.56	16	皿状	緩斜	自然	土層部	
13	F 6 a5	N-30°-W	楕円形	0.62 × 0.40	20	皿状	緩斜	人為		
14	F 5 j5	N-30°-W	楕円形	0.98 × 0.74	16	皿状	緩斜	人為	土層部	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
15	E 5e9	N-48°-E	精円形	1.08×0.56	12	皿状	縦斜	人為		
16	E 5e8	N-83°-E	精円形	1.10×0.98	30	皿状	縦斜	自然		
17	E 5e8	N-4°-W	精円形	1.05×0.94	70	平皿	外傾	人為	土師器	
18	F 6e4	N-70°-E	精円形	0.92×0.77	32	皿状	縦斜	人為		
19	E 5f9	N-40°-E	[精円形]	1.45×1.18	106	平皿	直立	人為	土師器	
20	E 5f7	-	円形	0.76×0.74	25	平皿	外傾 縦斜	自然	縄文土器	
21	E 5b0	N-60°-W	不定形	1.52×1.30	86	平皿	外傾	人為		
22	E 5e8	N-48°-W	不整精円形	1.40×1.06	80	皿状	外傾	人為	土師器	
23	E 5f7	-	[円形]	1.07×1.00	100	平皿	外傾	人為	土師器	
24	E 5f7	N-10°-W	精円形	0.45×0.39	29	皿状	縦斜	自然		
25	E 5b6	N-71°-W	不整円形	0.96×0.95	68	平皿	外傾	人為		
26	E 5b6	N-15°-E	精円形	0.58×0.42	32	皿状	外傾	自然		
27	E 5b4	N-11°-E	精円形	0.62×0.49	21	皿状	縦斜	自然	土師器	
28	F 6b4	N-80°-E	精円形	1.78×1.30	70	平皿	外傾	人為		
29	E 5f9	N-31°-W	不定形	1.68×1.57	75	平皿	外傾	人為	土師器	
30	E 5f9	N-85°-E	精円形	0.96×0.69	38	平皿	外傾	人為	土師器	本跡→SD 1
31	E 6a2	-	円形	1.02×0.99	26	平皿	外傾	自然		
32	D 5j8	N-71°-W	精円形	0.80×0.52	30	皿状	外傾 縦斜	自然		
33	E 5b8	-	[円形]	0.70×(0.43)	18	平皿	外傾 縦斜	自然		本跡→SD 1
34	E 5e8	N-45°-W	精円形	0.98×0.76	40	皿状	縦斜	自然	土師器	
35	E 5e8	N-40°-W	精円形	0.78×0.56	24	皿状	縦斜	人為		
36	E 5e8	-	円形	0.54	12	平皿	縦斜	自然	土師器	
37	E 5c5	N-17°-E	精円形	0.92×0.52	28	平皿	縦斜	自然		
38	E 5c3	-	円形	0.66×0.60	30	皿状	縦斜	人為	縄文土器、土師器	
39	E 5c3	N-87°-E	精円形	0.64×0.46	26	皿状	縦斜	人為	縄文土器	
40	E 5c5	N-21°-W	精円形	1.05×0.66	19	平皿	縦斜	人為		
41	E 5d5	N-63°-W	精円形	0.49×0.42	18	皿状	縦斜	人為		
42	E 5d4	N-73°-E	精円形	0.55×0.50	15	皿状	縦斜	人為	土師器	
43	E 5d4	-	円形	0.48×0.46	10	皿状	縦斜	自然		
44	E 5b2	N-36°-W	精円形	0.97×0.76	30	皿状	外傾 縦斜	自然	土師器	
45	D 5f9	N-35°-E	精円形	1.10×0.93	48	皿状	外傾 縦斜	人為	土師器	
46	E 5a6	N-82°-W	精円形	1.48×1.06	19	皿状	縦斜	人為	土師器	
47	D 5f6	N-60°-E	精円形	0.59×0.43	28	皿状	外傾 縦斜	自然		
48	E 5d8	-	不整円形	0.86×0.82	12	平皿	縦斜	自然		SD 2→本跡
49	D 5g7	N-59°-W	精円形	0.87×0.60	14	皿状	縦斜	自然		
50	D 5g9	N-39°-W	精円形	0.94×0.76	42	皿状	縦斜	人為		
51	D 5g9	N-5°-W	精円形	0.67×0.52	30	皿状	縦斜	人為		
52	D 5e9	N-39°-W	精円形	0.68×0.60	45	皿状	縦斜	自然	縄文土器	
53	D 5e8	-	円形	0.52×0.51	10	平皿	縦斜	自然		
54	D 5e7	-	円形	0.56×0.52	22	凸凹	縦斜	人為		
55	D 5b8	-	円形	1.05×1.00	48	皿状	外傾 縦斜	人為	土師器	
56	D 4a8	N-61°-E	精円形	0.74×0.68	34	皿状	縦斜	人為		
57	E 5b7	N-74°-W	精円形	0.83×0.70	12	平皿	縦斜	自然	土師器	
58	D 5b2	-	円形	1.22×1.20	36	平皿	外傾 縦斜	人為	縄文土器、土師器	
59	D 4b7	N-17°-W	不定形	1.04×0.97	15	皿状	縦斜	人為	縄文土器	
60	D 5f7	N-65°-W	精円形	0.68×0.60	14	平皿	縦斜	不明	縄文土器	
61	D 5f8	N-62°-W	精円形	1.04×0.64	10	平皿	縦斜	人為	縄文土器、土師器	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
62	C 4 h5	N - 44° - E	楕円形	1.76 × 0.94	60	皿状	外傾 人為			
63	C 4 i5	-	円形	0.90 × 0.82	24	皿状	縦斜 人為	土師器		
64	D 4 h7	N - 25° - E	楕円形	0.89 × 0.64	10	平皿	縦斜 自然	縄文土器		
65	E 5 e4	N - 68° - W	[楕円形]	3.60 × 1.34	24	平皿	縦斜 人為	縄文土器	SD 2新田不明	
66	D 4 g5	-	[円形]	1.13 × [1.00]	37	平皿	縦斜 自然	土師器		
67	C 4 g1	N - 2° - E	不定形	1.34 × 1.31	27	皿状	縦斜 自然	縄文土器、土師器		
68	D 4 h3	N - 22° - W	不整楕円形	1.32 × [1.06]	92	皿状	外傾 縦斜	自然	縄文土器、土師器	
69	D 4 e3	N - 6° - E	不定形	1.50 × 1.41	15	平皿	外傾 縦斜	人為	縄文土器	
71	D 4 e1	N - 5° - W	楕円形	0.74 × 0.65	23	皿状	縦斜 自然			
74	C 4 g4	N - 4° - E	楕円形	2.05 × 1.86	41	平皿	外傾 人為	土師器		
75	C 4 g2	N - 65° - E	[楕円形]	(1.86 × 1.05)	(17)	平皿	縦斜 自然	縄文土器、土師器	本跡→SD 7	
77	D 4 e1	N - 9° - W	楕円形	1.34 × 1.21	27	平皿	外傾 縦斜	人為	SD 6→本跡	
79	E 5 d9	N - 38° - W	楕円形	0.68 × 0.61	24	皿状	縦斜 自然	縄文土器		
80	D 5 e9	N - 38° - W	楕円形	0.68 × 0.56	22	皿状	外傾 縦斜	人為		
81	D 4 i7	N - 24° - E	楕円形	0.68 × 0.60	16	皿状	縦斜 自然	縄文土器		

(3) 溝跡

第1号溝跡については、文章で説明を行い、その他の溝跡については、規模・形状等について土層断面図(第29図)と一覧表を掲載する。平面図については遺構全体図(第34図)に示す。

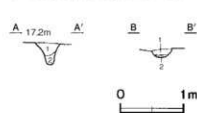
第1号溝跡(第28・34図)

位置 調査区南部のE 5 h5～F 5 a9区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第30・33号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 F 5 a9区で調査区域外から北方向(N - 5° - W)へ直線的に延び、E 5 h9区で西方向(N - 88° - E)にL字状に屈曲し、F 5 h5区で再び調査区域外に延びている。そのため、長さは28.35mしか確認できなかった。上幅22～40cm、下幅5～14cm、確認できた深さ8～34cmである。調査区際際で確認できる断面は箱笥状で、最も浅くなる北部ではU字状になるが、底面の標高はおおむね一定で大きな差はない。壁は外傾している。

覆土 基本土層の第2層上面から掘り込まれており、2層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。



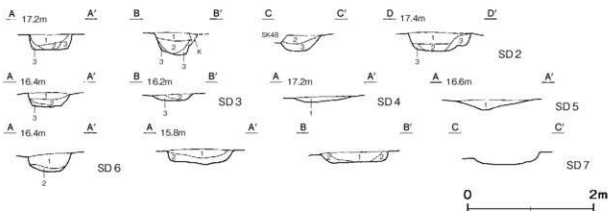
第28図 第1号溝跡実測図

土層解説

- 1 褐色 土 ロームブロック微量
- 2 褐色 土 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片9点(深鉢)、土師器片5点(高坏類2、甕1、甕類2)、石器1点(鎌)が出土しているが、混入したものと考えられる。

所見 出土遺物からの判断が難しいため、時期は不明である。形状や方向から、区画溝の可能性はある。



第29図 第2～7号溝跡実測図

第2号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 黒暗褐色 ロームブロック中量

第3号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第4号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第5号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第6号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第7号溝跡土層解説

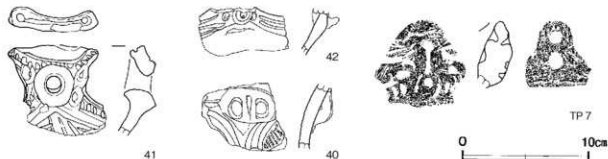
- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

表5 その他の溝跡一覧表

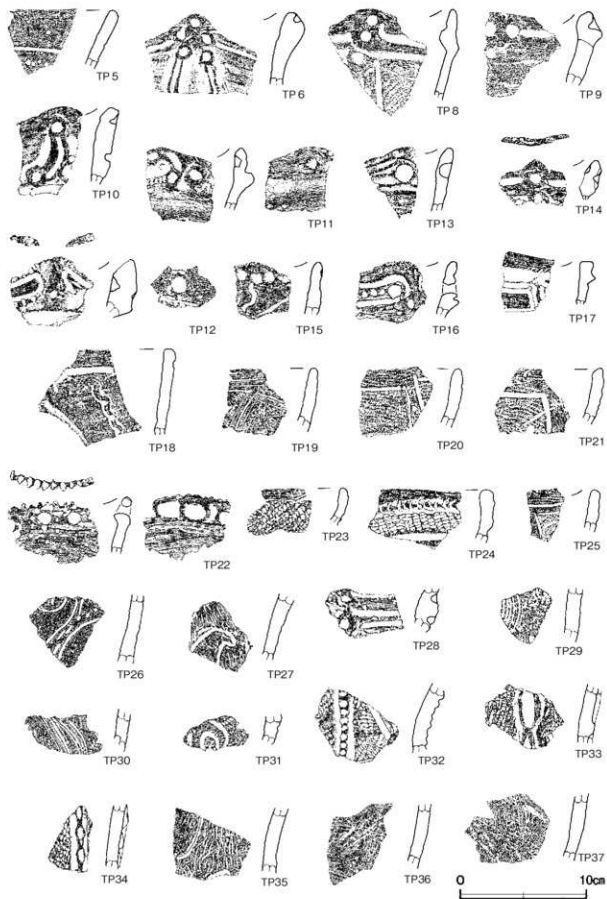
番号	位置	方向	平面形	規模			断面	埋面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)					
1	E 5 M - F 5 a	N - 88° - E S - 5° - W	流し牛状	(28.35)	0.22 - 0.41	0.05 - 0.14	8 - 34	U字状	外植 人為	縄文土器、土師器、石器	SK30・33 → 本跡
2	E 5 f2 - E 6 a	N - 64° - E S - 80° - W	直線 - L字状	38.60 + (20.80)	0.50 - 1.08	0.20 - 0.86	(0) - 35	溝台型 U字状	外植 人為	縄文土器、土師器、石器、鉄製品	SI 2 → SK76 → 本跡 → SK48 SK65 真田不明
3	C 4 b7 - C 5 H	N - 78° - W	直線状	19.15 + (5.30)	0.32 - 0.63	0.16 - 0.51	(0) - 22	溝台型 U字状	外植 人為	縄文土器、土師器	
4	E 4 a6 - E 4 a	N - 86° - W	直線状	12.24	0.81 - 1.13	0.71 - 0.95	2 - 8	U字状	磁葎 自然	縄文土器、土師器、磁葎	
5	D 4 c3 - D 4 c5	N - 81° - E	直線状	10.73	1.00 - 1.28	0.69 - 1.07	1 - 16	U字状	磁葎 人為	縄文土器	
6	C 4 f3 - D 3 a	N - 18° - E	直線状	(37.25)	0.26 - 0.56	0.10 - 0.38	4 - 28	U字状	外植 人為	縄文土器、土師器	本跡 → SK77
7	C 4 f3 - D 3 a	N - 42° - E S - 28° - W	直線状	(36.33)	0.97 - 1.19	0.67 - 0.97	7 - 55	溝台型	外植 人為	縄文土器、土師器	SK75 → 本跡

(4) 遺構外出土遺物(第30～32図)

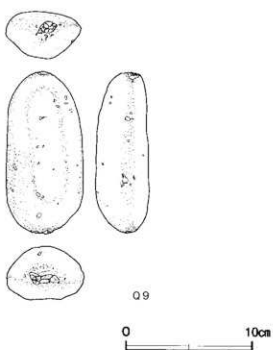
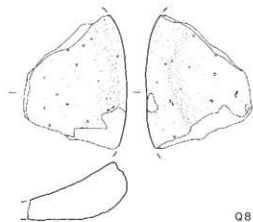
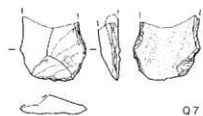
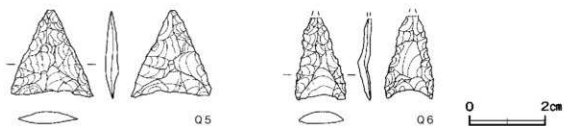
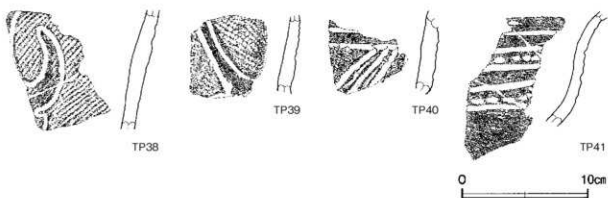
今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第30図 遺構外出土遺物実測図(1)



第31图 遗構外出土遺物実測図(2)



第32図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表(第30～32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
40	縄文土器	深鉢	-	(5.3)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	沈線→紅縄文 連続した内彩浮文と刺突 内面ナナテ	SI 3	5% PL. 7
41	縄文土器	深鉢	-	(7.1)	-	長石・石英	橙	普通	内彩浮文と内彩刺突→厚孔・口肩部2条の沈線と連続刺突文 突起上面に内彩刺突と連続する沈線 内面磨き	表土	5% PL. 7
42	縄文土器	浅鉢	-	(3.8)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	隆帯貼り付け→沈線→刺突 内面磨き	表土	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 5	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	沈線区画 区画内列点文 外・内面磨き	表土	
TP 6	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	口縁部小波状部 縦位隆帯貼り付け後沈線→内形の胎付文と竹管状工具による刺突 口唇部沈線 内面ヘタナテ	SI 6	PL 7 器面荒れ
TP 7	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	口縁部小波状部 口唇部沈線→隆帯・内形の胎付文→外・内面内形刺突 口唇部筋み 外・内面一部磨き 串刺	SI 3	PL 7
TP 8	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	口縁部小波状部 1区横文→外・内面に内形の胎付文と隆帯→竹管状工具による刺突 沈線 内面ナテ	SI 5	PL 7
TP 9	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	口縁部小波状部 内形の胎付文 内形刺突 沈線 外・内面磨き	表土	
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	口縁部小波状部 「ノ」字状隆帯→内形の胎付文→竹管状工具による刺突→横位沈線 外・内面一部磨き	表土	PL 7
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	口縁部小波状部 横位隆帯→「ノ」字状隆帯→内形の胎付文→筋み→外・内面に竹管状工具による刺突 外・内面磨き	表土	器面荒れ
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	口縁部小波状部 高内伏沈線 筋み 外・内面に竹管状工具による刺突 外・内面一部磨き	表土	
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	口縁部小波状部 内形刺突文→浅い沈線 内面ナテ	表土	
TP14	縄文土器	浅鉢	長石・石英	明赤褐	口縁部小波状部 外・内面内形の胎付文と刺突→沈線 外・内面磨き	表土	
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	口縁部連続内形刺突 蛇行沈線 内面ナテ	表土	
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	口縁部小波状部 半角円状の横位沈線→沈線部に穿孔1か所と縦やかた波状口縁 口唇部に筋み 口唇部に隆帯→方形区画沈線文 内形刺突 内面磨き	表土	PL 7
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	口縁部沈線 縦位のコンパス文 斜行沈線 赤彩痕	表土	
TP18	縄文土器	浅鉢	長石・石英	黄褐色	口縁部沈線 縦位のコンパス文 斜行沈線 赤彩痕	SI 5	PL 7
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	斜行条線 横位の条線 内面ナテ	表土	PL 7
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	地縄文→方形区画文	表土	PL 7
TP21	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	単筋LR縄文→方形区画文	表土	
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	口縁部小波状部 口唇部筋み 内面内形の胎付文→穿孔 外・内面磨き	SI 3	PL 7
TP23	縄文土器	鉢	長石・石英	にぶい赤褐	直線反折筋LR縄文→口唇部沈線 内面一部磨き	表土	
TP24	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	単筋RL縄文→沈線 半角竹管状工具による孔形文 口唇部磨き	SI 3	PL 7
TP25	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	波状口縁 沈線→単筋LR縄文 外・内面磨き	表土	
TP26	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	沈線区画 区画内列点文 外面磨き	表土	PL 7
TP27	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	沈線 3本1単位の細かき条線 内面磨き	表土	PL 7
TP28	縄文土器	深鉢	長石・石英	明黄褐	横位沈線→内形の胎付文→刺突 外・内面磨き	表土	
TP29	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	柳葉状工具による弧状条線 内面一部磨き	SI 3	
TP30	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	柳葉状工具による条線 外・内面磨き	表土	
TP31	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	単筋LR縄文→渦巻き文→縄文磨り消し 内面ナテ	表土	
TP32	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	単筋LR縄文→隆帯→連続刺突 沈線 内面磨き	表土	PL 7
TP33	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	単筋LR縄文→横位隆帯 内面ナテ	表土	PL 7
TP34	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	単筋RL縄文→隆帯→押捺	表土	PL 7
TP35	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	弧状垂下条線 縦位条線 弧状沈線→区画内磨き 内面ナテ	表土	PL 7
TP36	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	5本1単位の条線 内面ナテ	表土	
TP37	縄文土器	深鉢	長石・石英	黄褐色	4～5本1単位の条線 内面ナテ	表土	
TP38	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐	単筋LR縄文→沈線→区画内縄文磨り消し 内面ナテ	SI 5	PL 7
TP39	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	沈線→光塩縄文単筋LR 沈線間磨き 内面磨き	表土	PL 7
TP40	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	沈線→LR縄文 内面磨き	SI 6	
TP41	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	明褐	横位の平行沈線→連続刺突文 内面一部磨き	SI 5	PL 7

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 5	皿	2.3	2.2	0.3	1.2	頁岩	円盤形条線 両面押圧剥離	SD 1	PL 8
Q 6	皿	(2.2)	1.3	0.4	0.7	チャート	無条線 両面押圧剥離 先端部欠損	表土	PL 8
Q 7	打製石斧	(5.1)	(5.2)	(1.8)	(40.7)	ホルンフェルス	自然面残存	SI 3	PL 8
Q 8	石硯	(10.6)	(8.1)	4.1	(317.8)	安山岩	磨部は磨状に凹心	SI 5	PL 8
Q 9	磁石	12.7	6.0	4.1	487.7	安山岩	全面磨部 両端に磨打痕	SI 3	

第4節 ま と め

1 はじめに

調査の結果、旧石器時代の石器出土地点1か所、縄文時代の炉跡1基、土坑4基、古墳時代前期の竪穴建物跡5棟、竪穴遺構1基等を確認し、新統的な土地利用の状況が明らかとなった。ここでは、土地利用の変遷を概観し、中心となる古墳時代前期の集落について検討し、当遺跡の性格を示したい。

2 縄文時代まで

最も古い時期で、旧石器時代の人々の活動痕跡が確認できた。ローム層中から石核が出土し、遺構外からではあるが、ナイフ形石器や剥片も出土している。次に人々の活動が確認できたのは縄文時代後期である。堀之内式期から加曾利B式期にかけての炉跡と土坑を確認した。また、調査区全域から、縄文土器片が多数出土しており、後期初頭の称名寺式から中葉の加曾利B式までの範疇に入る。今回報告した古墳時代前期の竪穴建物跡覆土中からも多く出土しており、このような遺物の出土状況から、調査区の周辺に集落が展開していたと考えられる。当該期の集落は、下流の原口遺跡¹⁾や高崎貝塚²⁾で確認されており、当遺跡とも関係性が強いものと考えられる。

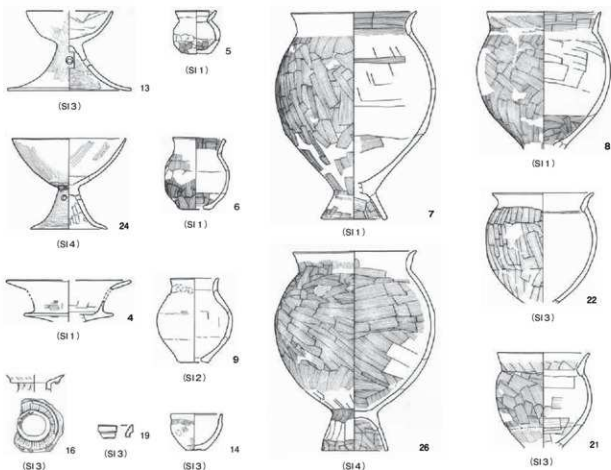
3 古墳時代

当遺跡の古墳時代前期の集落では、遺構数は多くないものの、各建物跡から一定量の遺物が出土している。ここでは、出土土器とその出土状況等から、集落の様相について述べる。

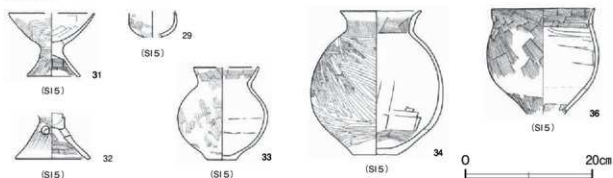
(1) 出土土器と集落の様相について (第33図)

当遺跡の位置する地域の古墳時代前期の土器様相について、いくつかの見解³⁾をもとにおおまかな流れをまとめると、①古墳時代開始期に南関東系の影響を強く受けた土器が定着 ②外来系土器が定着、甕が単口縁に切り替わる ③南関東系の台付甕主体から上総系の平底甕主体への変換、精製の小形埴の出現 ④柱状脚高坏の出現 という変遷をたどる。今回報告した竪穴建物跡は、出土土器の様相から②から③の段階に含まれる。新瀨上遺跡古段階 (②段階) に該当する竪穴建物跡がSI 1～4で、新段階 (③段階) に該当する竪穴建物跡がSI 5となる。古段階では、北陸系の器台 (4)・東海系の壺 (16)・東海系のS字状口縁台付甕 (19)の外来系土器が出土しており、台付甕 (7・8・26) が多くみられる。台付甕および甕は、最大径に対する口縁部径の割合が70%以下で、口縁部がすはまるようになるもの (A類) と、80%以上で口縁部が広がって見えるもの (B類) の2つに大別できる。小形高坏 (13) は、脚部がラッパ状に開き、在地での形式変化が進んだ段階のものと思われる。元屋敷系の高坏 (24) は、脚部がラッパ状に開き、坏部に稜を持たないタイプのものである。一方、新段階のSI 5出土遺物の中には、精製の小型丸底系と呼称される埴 (29) が確認できる。台付甕 (36) はB類としたものであるが、口縁部がやや内彎する。高坏 (31・32) は、坏部と脚部の結合部が厚くなっている。また、SI 5出土遺物の中には、台付甕の脚部に該当する土器片は確認できず、平底甕または壺の底部に該当する土器片が、他の4種の合計よりも多く、19点出土している。このことも、新段階への転換が進んだことを示唆するものと思われる。なお、第1号竪穴遺構は、出土遺物は少ないが、出土した甕から、5棟の竪穴建物跡のいずれかとは同時期に存在していたと思われる。

古段階



新段階



第33図 新溜上遺跡古墳時代出土土器

周辺地域の編年との関係は、新溜上遺跡古段階・新段階がそれぞれ、比田井克仁氏のⅠ段階新相・Ⅱ段階、加藤修司氏の草刈Ⅱ期前半・同後半、高花宏行氏のⅢa・Ⅲb期、大村直氏の草刈1式期・同2式期に対応するものと考えた⁴⁾。

(2) 竪穴建物跡にみられる祭祀について

それぞれの竪穴建物跡から、特徴的な土器、あるいは特徴的な出土状況の土器を確認した。本文中で祭祀の可能性のあるものとして提示しているが、大きく分けて3つのパターンが想定できる。第1は、小形

壺や小形の鉢を利用するものである。比田井氏の論説⁵⁾では、「集落の紐帯維持・強化」のための「屋内祭祀儀礼にかかわる器種」として位置づけられている。単体で出土したのが5・14で、それぞれ想定される入り口部分の右側から出土している。これらは堅穴建物廃絶に伴うものと考えている。そのほか6・9は一定の範囲内にまとまっていた破片が接合したものである。これらは、その大ききから日常的に使用しない器として、祭祀と関連付けて考えられることが多いが、小形であっても種初を入れる器や彩色のための絵の具を入れる器などに使用することも可能なので、出土状況等を踏まえた検討が必要と思われる。第2は、土器に穿孔をするもので、6・9が該当する。これらは接合した破片に底部穿孔された形跡がうかがえるもので、底部穿孔の際に土器自体が割れてしまい、祭祀には利用されなかったことも考えられる。また、SI 2の11(第16図)は、頭部下に2か所の穿孔があるもので、上半分が残存した状態で、床面に正位で置かれたように出土した。接合状況から、補修痕でないことは明らかである。北前遺跡の第31号堅穴建物跡から、焼成前のものと思われるが、口縁部に2か所穿孔された土器が出土している⁶⁾。今回の調査で出土した3点は、丁寧に穿孔しようとした形跡はみられず、どれも粗い穿孔の仕方であった。第3は、廃絶する建物内で土器を叩き割る、といった行為が想像されるもので、SI 4から出土した26～28(第23図)とSI 5から出土した34・35(第25図)がある。それぞれ一定の範囲内にまとまって出土した土器片が接合して完形に近い形になっているものである。特に、34・35は、破片の接合状況から考えられる力の伝わり方や、出土状況からみる破片の飛散の仕方などを含めて検討すると、壺を横向きに持ったまま床面に叩きつける、といった行為が想像できる。33も、同様に叩きつけられた可能性があり、こうした行為が堅穴建物廃絶時に行われているとすれば、祭祀に伴う儀礼的行為として考えてよいと思われる。

今回の調査で検討できたのは、3つのパターンであったが、このほかにも、宮内遺跡の第1号堅穴建物跡でみられる廃絶時に炉の周辺に土器片をまとめおく行為⁷⁾や、高須賀中台東遺跡の第3・23号堅穴建物跡でみられる建物建設に伴い床下に土玉を埋める行為⁸⁾なども、祭祀行為として挙げることができる。古墳時代前期は、前述した④の段階に至るまでは人々の移動や交流が活発であり、土器と同様、祭祀行為も時期や地域によって多岐にわたることが考えられる。今回挙げた儀礼的行為なども含め、集落内における祭祀を詳細に検討していくことで、古墳時代前期の社会がより明らかになっていくものと思われる。

(3) 集落の展開について

当遺跡の性格を考えるにあたり、江川流域の古墳時代前期の集落の展開を概観する。江川が流れる猿高台地の南部では、東に飯沼、南に常陸川(現在の利根川)、西に長井戸沼があり、広い低地が広がっていた。古墳時代前期の遺跡の多くは、これらの広大な低地に隣接した台地上に存在しており、低地開発を目指した人々がこの地に移住してきたことが想像できる。江川流域では、古墳時代初頭(①段階)に、常陸川に合流する江川下流の北前遺跡⁹⁾で集落が成立し、間もなくして、谷津を挟んで対岸にある高崎貝塚にも集落が確認できるようになる。高崎貝塚では、弥生時代後期中葉の集落が確認されているが、調査した範囲内では一度断絶がみられるようである。②の段階になると、上流の当遺跡でも集落が展開されるようになり、③の段階まで確認できる。さらに当遺跡と時期をずらすように、南に4km離れた宮内遺跡で集落が展開されるようになり、それ以降、平安時代まで長く集落が営まれることになる。江川流域では、それほど広い耕地は確保できないと思われるが、下流の北前遺跡から上流の当遺跡までの間に、約2kmの間隔で古墳時代前期の遺跡が点在している。おそらくは比較的小規模の集落が展開していたものと考えられる。台地の中央を貫析する河川の中流域にも集落を展開していくことにどういった意識が向いていたのか、という点に関しては考察するまでに至らなかった。資料の増加を待って検討していきたい。

4 おわりに

古墳時代前期の集落の様相を中心に、新溜上遺跡の歴史的変遷を概観した。特に、古墳時代前期の集落では、堅穴建物廃絶に伴う祭祀行為を検討することができた。また、猿島台地中央部を流れる江川流域にも集落が展開しており、未調査の集落遺跡が存在する可能性がより高まった。そのほかに、今回検討に至らなかった課題がいくつか残った。一つは、甕や壺の製作技法についてである。体部内面にハケ目が施されているものがあるが、その中に下位のみに施され、その後上位と接合しているものがある。6～8などが挙げられるが、一方、21・26のように、全体を形作ってから内面にハケ目を施しているものもみられる。周辺遺跡の調査例では、前者の類例は羽黒遺跡¹⁰⁾においてのみ確認できたが、該当するものは非常に少ない。当遺跡内の資料のみで考える限り、時期差を表すものではないようである。器壁を薄くする都合でたまたまそうなったのか、別の地域の影響を受けたものなのかといった結論は出せなかった。もう一つは、SI 3の炉形態についてである。3個体の土器片を炉の縁辺の一面に差し込んでおり、火除けとして使用したと考えられるものである。非常に珍しい形態で、宮内遺跡の第21号堅穴建物跡に土器を利用した炉があるが、こちらは甕の体部上位を逆位に埋め、炉体土器として使用していたもの¹¹⁾である。当遺跡より新しい段階のものであり、当遺跡から系譜を追えるものと考えられる。しかし、起源については、どういった流れで当遺跡に入ってきたものなのか、明確にすることができなかった。これらの点を検討していくことが、この遺跡の性格をより明確にするものと考え、今後の検討課題としたい。

註

- 1) 大森雅之「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 原口遺跡・北前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第83集 1993年3月
- 2) 鶴見貞雄「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 高崎貝塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』第88集 1994年3月
- 3) a 比田井克仁「下総地域の主体性—東京湾岸との相対的關係から見た弥生—古墳時代の様相—」『法政考古学』第21集 法政考古学会 1995年3月
b 加藤修司「房総半島における前期古墳の展開—重要遺跡確認調査の成果と課題— 第1章 土器編年案」『千葉県文化財センター 研究紀要』21 2000年9月
c 高花宏行「印旛地域における古墳時代開始期の土器様相」『財団法人印旛都市文化財センター研究紀要』2 2001年3月
d 比田井克仁「関東における古墳時代出現期の変革」藤山潤 2001年7月
e 大村直「南中台遺跡と周辺遺跡の土器編年」『市原市南中台遺跡・荒久遺跡A地点』上総国分寺台遺跡調査報告XX・市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集 2009年3月
- 4) 註3) 各筆者のものによる
- 5) 註3) dによる
- 6) 註1) に同じ
- 7) 小林和彦 宮崎剛「宮内遺跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第359集 2012年3月
- 8) 坂本勝彦「高須賀中台遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第382集 2014年3月
- 9) 註1) に同じ
- 10) 駒澤悦郎「羽黒遺跡 一級河川水沼川河川改修工事事業地内埋蔵文化財調査報告書1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第202集 2003年3月
- 11) 註7) に同じ



第4章 大 日 後 遺 跡

第1節 調 査 の 概 要

大日後遺跡は、坂東市の北部に位置し、江川右岸の標高16～17mの台地縁辺部に立地している。遺跡の範囲は、南北約100m、東西約110mであり、遺跡の北側には埋没谷が入っている。今回の調査区は遺跡の北部にあたり、埋没谷の縁辺に縄文時代の遺物集中地点を確認した。調査面積は3,476㎡で、調査前の現況は畑地である。調査区は道路を挟んで2か所に展開しており、本文中では西側の調査区をA区、東側の調査区をB区と呼称する。

調査の結果、遺物集中地点3か所（縄文時代）、土坑32基（時期不明）、溝跡2条（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に2箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏・甕）、須恵器（甕）、土師質土器（小皿）、瓦質土器（播鉢）、陶器（碗・壺・皿・瓶・甕）、磁器（碗）、石器（尖頭器・鏃・磨石・スタンプ型石器・砥石）、剥片などである。

第2節 基 本 層 序

調査区北部には埋没谷が入り込んでおり、場所によって観察できる状況が異なる。基本層序は、テストピットを設定して確認することができなかったため、ここでは調査区域内で確認できた堆積状況を整理した模式柱状図として示す。埋没谷縁辺部（A区北部）の柱状図は第4号土坑周辺で確認したもので、台地平坦面（B区南部）の状況は第1号溝跡や遺物集中地点で確認できたものを整理したものである。

第1層は、暗褐色を呈する耕作土である。層厚は、台地平坦面では30cm程度、埋没谷縁辺部では70～80cm確認できる。

第2層は、陶磁器類が混入する黒色土層である。粘性・締まりともに普通で、調査区北側で確認できる層厚は30cm程度である。南側の台地平坦部では存在していないことから、谷部を埋めるように堆積した層と考えられる。

第3層は、明褐色を呈するソフト化したローム層である。粘性は強く、締まりは普通で、確認できた層厚は最大20cmである。多くは削平されており、部分的に確認できる。

第4層は、暗褐色を呈するハードローム層である。粘性は強く、締まりはやや強く、層厚は20cm程度である。色調から第2黒色帯下部と考えられる。

第5層は、明褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は20cm程度である。

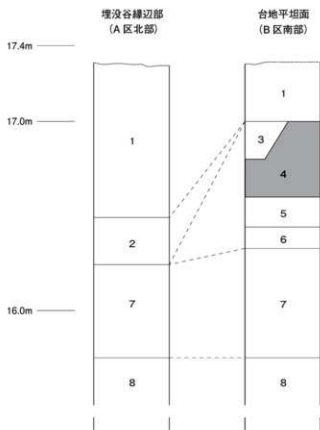
第6層は、灰黄褐色を呈する漸移層である。粘性は極めて強く、締まりはやや強く、層厚は10cm程度である。

第7層は、灰白色を呈する粘土層である。粘性は極めて強く、締まりは強く、層厚は60cm程度である。

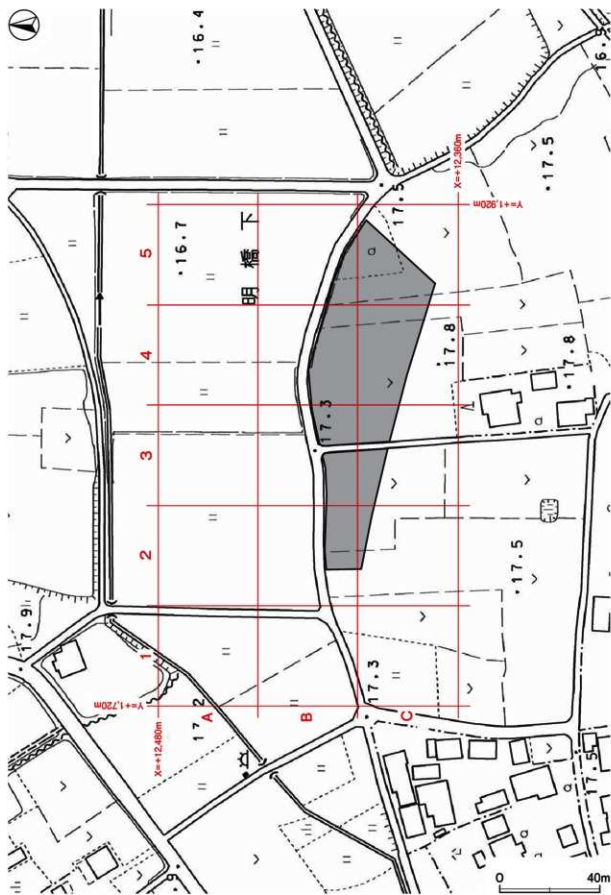
第8層は、暗褐色を呈する粘質土層である。粘性は極めて強く、締まりは強く、層厚は60cm程度まで確認したが、下部は未掘のため不明である。

A区の北東部を除いた範囲とB区の北部は、埋没谷に向かう緩やかな傾斜が始まっており、調査区域内で第3層から第7層までが削られている様子を確認した。第2層は、谷部を覆うように堆積しており、層中に確認

できる陶磁器片から、中世以降に形成されたものと考えられる。遺構は、台地平坦部では、第3層または第4層上面で確認した。斜面部では、第4層から第6層が流出しており、A区の北部では、第7層上面で確認した。



第35図 基本土層図



第 36 図 大日後遺跡調査区設定図（坂東市都市計画図 2,500 分の 1 から作成）

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

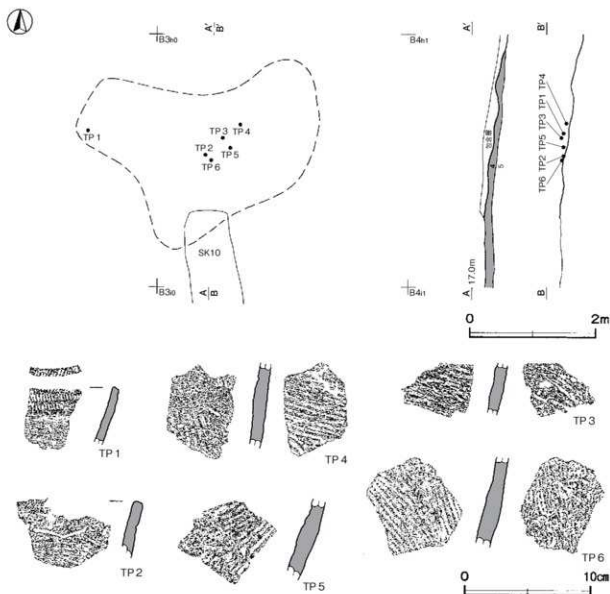
B区の遺構確認作業を行う段階で、縄文時代早期の遺物が集中して出土する範囲を調査区北部の埋没谷縁辺部で3か所確認し、調査を行った。

遺物集中地点

第1号遺物集中地点（第37図）

位置 B区西部のB3h9区～B3h0区、標高16mほどの谷に向かって下降する緩やかな斜面部に位置している。

重複関係 第10号土坑に掘り込まれている。



第37図 第1号遺物集中地点・出土遺物実測図

覆土 単一層で、粘性は弱く、締まりは普通である。谷の形成に伴い基本土層の第5層まで削られた緩やかな斜面上に堆積しており、含まれているローム粒子の状況などから判断して、自然に流れ込んだものと考えられる。

包含層土層解説
 暗 褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片 117 点（深鉢）、剥片 1 点が包含層中の図示した範囲内に集中して出土している。

土器は全てが小破片であり、接合関係はほとんどないことから、谷に向かう当地点で投棄したものとみられる。

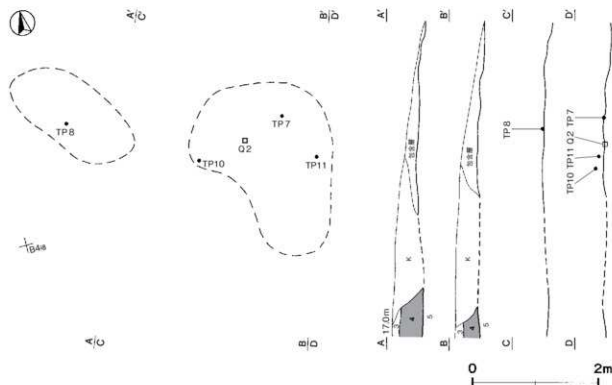
所見 本地点で出土した土器片の大半は、子母口式を含む早期後葉の条痕文系土器である。堅穴建物跡や土坑としての掘り込みは認められず、堆積状況や遺物の出土状況から判断して、谷に向かう斜面部で投棄された地点であると考えられる。

第1号遺物集中地点出土遺物観察表（第37図）

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	標高(m)	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	灰黄褐色	口唇・口縁部外面彫曲状による刺突文 外・内面擦痕	B 3 h9	16.733	PL10
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい黄	口縁部浅いV字状の沈線 外面貝殻条痕文	B 3 h0	16.736	PL10
TP 3	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	明赤褐色	外・内面貝殻条痕文	B 3 h0	16.784	
TP 4	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・繊維	橙	外・内面貝殻条痕文	B 3 h0	16.706	PL10
TP 5	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい黄橙	外面貝殻条痕文	B 3 h0	16.750	PL10
TP 6	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	橙	外・内面貝殻条痕文	B 3 h0	16.779	PL10

第2号遺物集中地点（第38・39図）

位置 B区中央部のB 4 h8区～B 4 i9区、標高16 mほどの谷に向かう緩やかな斜面部に位置している。



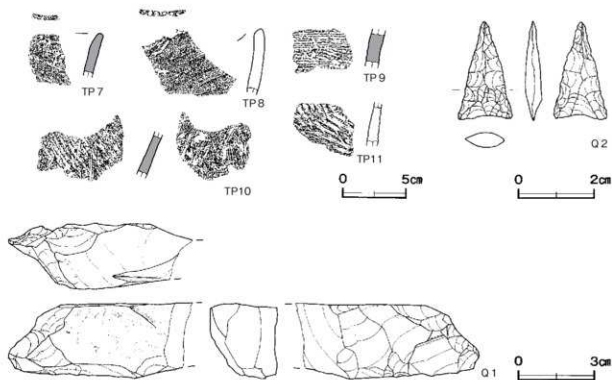
第38図 第2号遺物集中地点実測図

覆土 単一層で、粘性は弱く、締まりは普通である。谷の形成に伴い基本土層の第5層まで割られた緩やかな斜面上に堆積しており、含まれているローム粒子の状況などから判断して、自然に流れ込んだものと考えられる。また、第1号遺物集中地点と類似している。

包含層土層解説
黒褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片 80点（深鉢）、石器1点（鎌）、石核1点、粘土塊1点が包含層中の図示した範囲内に集中して出土している。土器は全てが小破片であり、接合関係はほとんどないことから、谷に向かう地点で投棄したものとみられる。

所見 本地点で出土した土器片の大半は、早期後葉の条痕文土器である。堅穴建物跡や土坑としての掘り込みは認められず、堆積状況や遺物の出土状況から判断して、谷に向かう斜面部で投棄された地点であると考えられる。



第39図 第2号遺物集中地点出土遺物実測図

第2号遺物集中地点出土遺物観察表（第39図）

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	標高 (m)	備考
TP 7	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・燧石	黒褐色	外面磨痕	B 419	16.567	
TP 8	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	緩やかな波状口縁 口唇部割み 外面磨痕 内面ナデ	B 418	16.511	PL10
TP 9	縄文土器	深鉢	長石・石英・燧石・燧石	赤褐色	斜位の目殺条痕文→横位の細沈線文で区画	包含層中	16.687	PL10
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・燧石	明赤褐色	外・内面貝殻条痕文	B 418	16.738	PL10
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	外・内面貝殻条痕文	B 419	16.675	PL10 内面磨台着

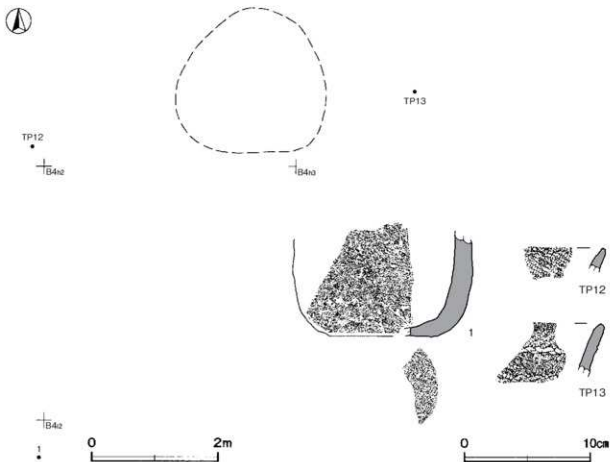
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	標高 (m)	備考
Q 1	石核	3.0	(7.3)	2.6	(71.7)	チャート	自然面残存	包含層中	-	PL10
Q 2	鎌	2.6	1.5	0.4	1.2	チャート	無茎鎌 両面押圧調整	B 418	16.696	PL10

第3号遺物集中地点（第40図）

位置 B区西部のB4g2区～B4g3区、標高16mほどの谷に向かう緩やかな斜面部に位置している。

遺物出土状況 縄文土器片9点（深鉢）が図示した範囲内に集中して出土しており、その周辺からも縄文土器片3点（深鉢）が出土している。土器は1を除く全てが小破片または細片であり、接合関係はないことから、谷に向かう当地点で投棄したものとみられる。

所見 一部細片のため確認できなかったが、本地点で出土した土器片の大半は、胎土に繊維を含む土器である。出土状況は、第1・2号遺物集中地点と類似しており、同じような状況で投棄された地点であると考えられる。



第40図 第3号遺物集中地点・出土遺物実測図

第3号遺物集中地点出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	標高(m)	備考
1	縄文土器	深鉢	-	[8.3]	[8.2]	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい橙	普通	外面へう型彫 胴部中位細かい染帯	B4日	16.830	5% PL10

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	標高(m)	備考
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい橙	卑部LR縄文	B4g1	16.696	PL10
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい赤黒	S字結節LR縄文 口唇部全面取り 内面ナデ	B4g3	16.645	PL10

2 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明確でない土坑32基、溝跡2条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 土坑

土坑については、規模・形状等について遺構全体図（第43図）と一覧表で掲載する。

表6 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	B 25	N-80°-W	不整形円形	1.41×1.20	56	平坦	外堀	自然入為		
4	B 3h3	-	[楕円形]	2.13×(0.88)	98	凹状	葎葎	人為	土師器	
6	C 5g1	N-90°-E	楕円形	1.08×0.98	14	平坦	葎葎	人為		
7	C 5f1	-	円形	1.14	22	平坦	葎葎	人為		
8	C 5c5	-	不整形円形	1.76×1.64	24	平坦	葎葎	人為	石器	
9	B 3h9	N-5°-W	長方形	1.46×0.78	6	平坦	葎葎	人為		
10	B 3h0	N-7°-W	長方形	2.08×0.76	16	平坦	葎葎	人為		IS 1→本跡
11	B 3d0	-	円形	0.97	31	凹状	葎葎	人為	縄文土器	
12	B 3d0	N-14°-W	長方形	1.64×0.84	18	平坦	外堀	人為	縄文土器	
13	C 3b9	N-4°-W	長方形	1.62×0.65	10	平坦	葎葎	人為	土師器、須恵器	
14	C 4e0	N-5°-E	長方形	1.84×0.73	14	平坦	葎葎	人為		
15	C 5e1	N-82°-E	長方形	3.32×0.75	19	平坦	葎葎	人為	陶器、石器	
16	C 4f0	N-83°-E	長方形	2.36×0.60	9	平坦	葎葎	人為		
17	C 3c8	N-5°-W	長方形	2.18×0.82	17	平坦	葎葎	人為		
18	C 4d2	N-32°-E	楕円形	1.24×1.12	28	凹状	葎葎	人為		
19	C 4e7	N-25°-W	隅丸長方形	1.30×1.07	15	平坦	葎葎	人為		
20	B 3j9	N-19°-W	長方形	2.90×0.65	7	平坦	葎葎	人為		
21	B 4j0	N-4°-E	長方形	1.32×0.72	10	平坦	葎葎	人為	縄文土器	
22	C 5c4	-	不整形円形	1.32×1.26	18	平坦	葎葎	人為	瓦質土器	
23	C 4a6	N-1°-E	長方形	2.02×0.60	12	平坦	葎葎	人為	縄文土器	
24	C 5d1	N-76°-E	楕円形	1.64×1.04	106	凹状	外堀	人為	縄文土器	
26	B 4j4	N-1°-W	隅丸長方形	1.75×0.80	16	平坦	葎葎	人為		
27	C 4a5	N-1°-W	長方形	1.98×0.95	27	平坦	葎葎	人為		
28	C 4b3	N-15°-W	楕円形	1.19×0.73	29	凹状	葎葎	人為		
29	C 3c5	N-78°-W	[楕円形]	2.14×(1.13)	30	平坦	葎葎	人為		
30	C 4d3	N-78°-E	隅丸長方形	2.25×1.98	94	平坦	直立外堀	人為	縄文土器	
31	C 5b1	N-11°-W	隅丸長方形	2.07×0.82	17	平坦	外堀	人為		
32	C 5g1	N-30°-W	楕円形	0.91×0.73	23	凹状	葎葎	人為		本跡→SD 2
33	C 2a9	-	円形	0.53×0.51	48	凹状	直立外堀	人為		
34	B 3j0	N-37°-W	楕円形	0.44×0.38	14	平坦	葎葎	人為		
35	B 4j1	N-61°-W	楕円形	0.60×0.46	31	平坦	外堀	人為		
36	C 4d3	N-27°-W	楕円形	0.94×0.56	18	平坦	外堀	人為		

(2) 溝跡

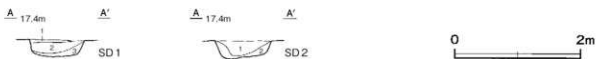
溝跡については、規模・形状等について土層断面図（第41図）と一覧表を掲載する。平面図については遺構全体図（第43図）に示す。

第1号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量

第2号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量



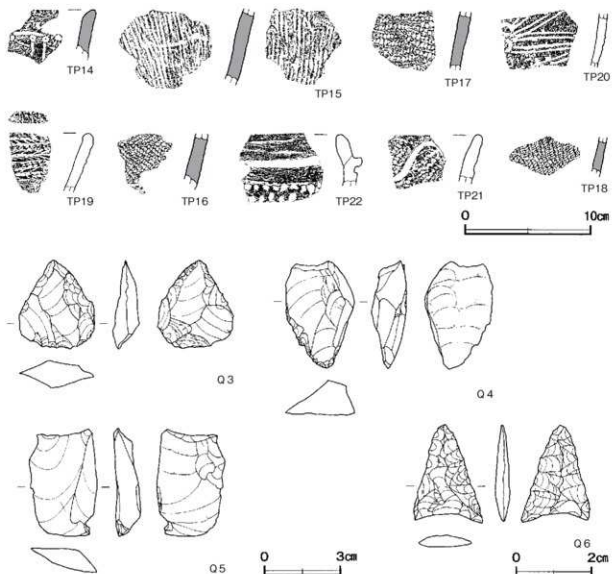
第41図 第1・2号溝跡実測図

表7 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)					
1	C 3㉔-C 3㉕	N-0°	直線状	(5.16)	0.82~0.90	0.60~0.70	22~25	逆台形	外積	人為	縄文土器、瓦質土器	
2	C 4㉔-C 5㉕	N-49°-E	直線状	(7.06)	0.62~0.93	0.36~0.70	14~30	逆台形	外積	人為		SK32→本跡

(3) 遺構外出土遺物(第42図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第42図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第42図）

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・繊維	赤褐色	竹管状工具による円形刺突文 沈線文 内面貝殻によるナデ	表土	PL11
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	橙	外・内面貝殻垂文	表土	PL11
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい橙	単筋Lによる羽状縄文 内面ナデ	表土	PL11
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	明褐色	無赤文 内面ナデ	表土	PL11
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい赤褐色	直前段合巻・前々段反性L縄文 内面ナデ	表土	PL11
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐色	L字部に刻み 微隆起線文→ヘラ状工具による斜位の連続刺突文	表土	PL11
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	交差する沈線文→竹管状工具による円形刺突	表土	PL11 器面荒れ
TP21	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	単筋L状縄文 蛇行沈線文 内面磨き	表土	PL11
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	L字縁部に横位隆帯 隆帯下に連続刺突文 内面ナデ	表土	PL11

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 3	尖頭器	3.5	3.0	1.1	8.9	頁岩	両面縁部調整 片面基部調整	表土	PL11
Q 4	刮片	4.2	2.7	1.4	13.5	燧石	二次加工による刃部作成 使用痕あり	表土	PL11
Q 5	刮片	4.3	2.7	1.0	9.6	頁岩	使用した可能性あり	表土	PL11
Q 6	鏃	3.6	1.9	0.4	1.3	チャート	無赤染 両面押圧痕跡	表土	PL11

第4節 ま と め

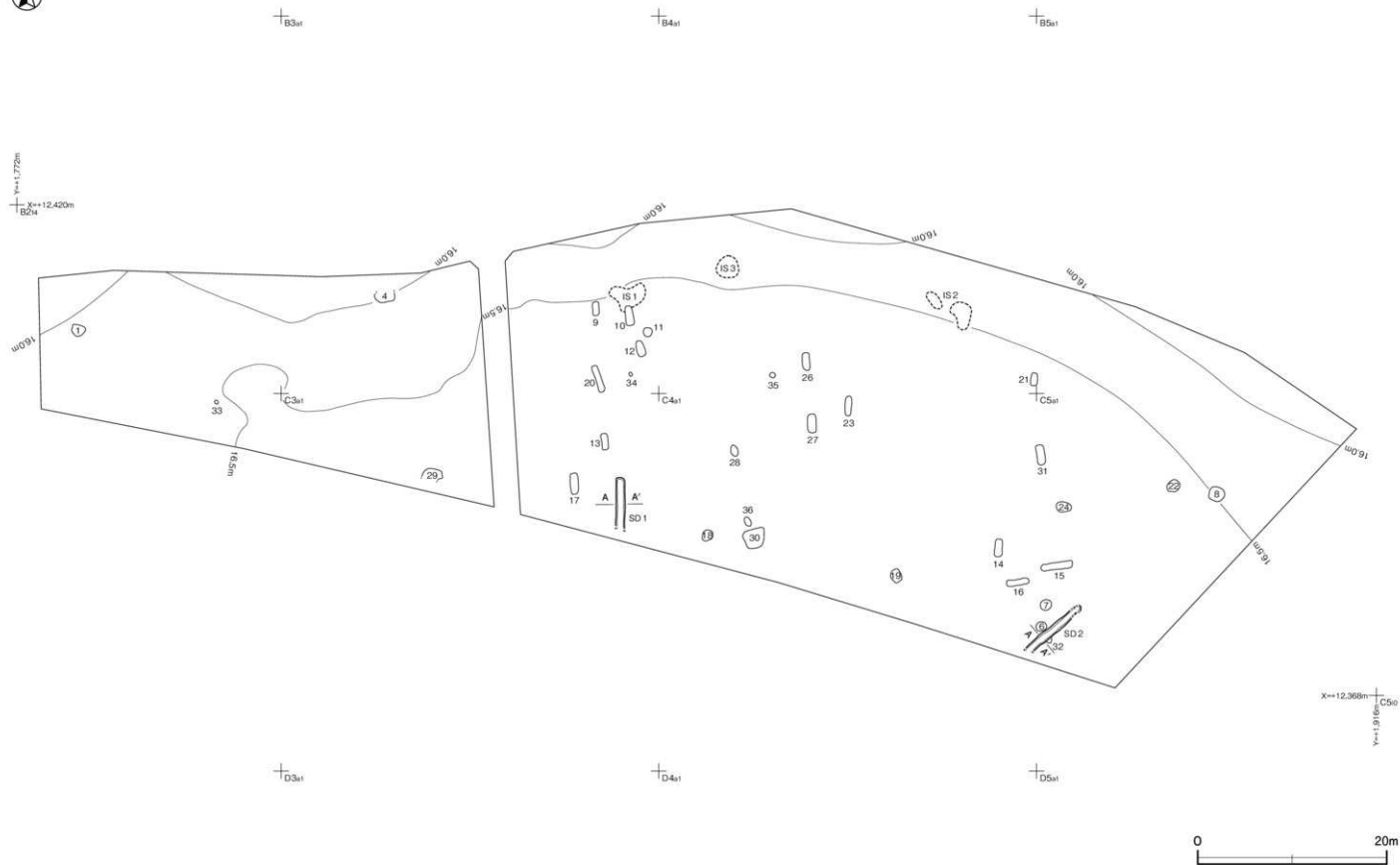
調査の結果、縄文時代早期後葉の遺物集中地点を確認した。当遺跡の北側には、江川から西に入り込む小さな埋没谷があり、その縁辺部で土器が投棄されたものと考えられる。猿島台地では、台地の間を樹枝状に河川が走っており、豊富な水資源の元に多くの動植物が集まっていたことが想像できる。猿島台地南部で、早期後葉の遺構が確認できた遺跡として、江川下流右岸にある高崎貝塚¹⁾、旧長井戸沼東岸にある長井戸遺跡群²⁾、鶴戸川中流左岸にある山崎遺跡群³⁾などがある。これらの遺跡は、低地に面した台地上に位置しており、そこを拠点として台地上で狩猟・採集活動を行っていたことが想像される。今回の調査で確認した埋没谷も、縄文時代早期の時期には小さな谷津として存在しており、この地域の人々にとって格好の水場であったものと思われる。資料の増加とともに、縄文時代早期の人々の活動の様子が明らかになっていくものと考えられる。

註

- 1) 鶴見貞雄「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 高崎貝塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』第88集 1994年3月
- 2) 鹿島直樹 前島直人「長井戸遺跡群 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第337集 2011年3月
- 3) 平成24年度の当財団調査による。

参考文献

- ・齋藤弘道「茨城県の縄文土器」『茨城県立歴史館叢書9』茨城県立歴史館 2006年3月
- ・金子直行「縄文土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション 2008年6月



第 43 図 大日後遺跡遺構全体図

第5章 井草本田遺跡群

第1節 調査の概要

井草本田遺跡群は、猿島郡境町の東部に位置し、鶴戸川から北東に伸びる低地の西側、台地縁部から台地上にかけて立地している。台地上の標高は約16mである。遺跡の範囲は、南北約770m、東西約430mであり、今回の調査区は遺跡の西部で、台地上の平坦面にあたる。調査面積は2,064㎡で、調査前の現況は畑地である。

調査の結果、土坑26基（縄文時代1・江戸時代2・時期不明23）、溝跡6条（江戸時代）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に1箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師質土器（小皿・焙烙・鉢・甕）、瓦質土器（甕）、陶器（碗・皿・鉢・襷鉢）、磁器（碗）、土製品（泥面子）、石器（石臼・砥石・火打石）、石核、剥片、金属製品（銭貨）などである。

第2節 基本層序

調査区東部の台地上の平坦面（C3e6～C3f6区）にテストピットを設定して基本土層の観察を行った。

第1層は、黒褐色を呈する耕作土である。層厚は29～36cmである。

第2層は、褐色を呈するソフトローム層である。締まりは普通で、層厚は15～25cmである。

第3層は、明褐色を呈するソフトローム層である。締まりは普通で、層厚は11～24cmである。

第4層は、暗褐色を呈するハードローム層である。締まりはやや強く、層厚は18～35cmである。色調から第2黒色帯上部と考えられる。

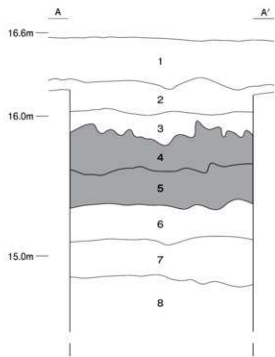
第5層は、暗褐色を呈するハードローム層である。締まりはやや強く、層厚は22～33cmである。第4層より色調は暗く、第2黒色帯下部と考えられる。

第6層は、明褐色を呈するハードローム層である。締まりは強く、層厚は19～28cmである。

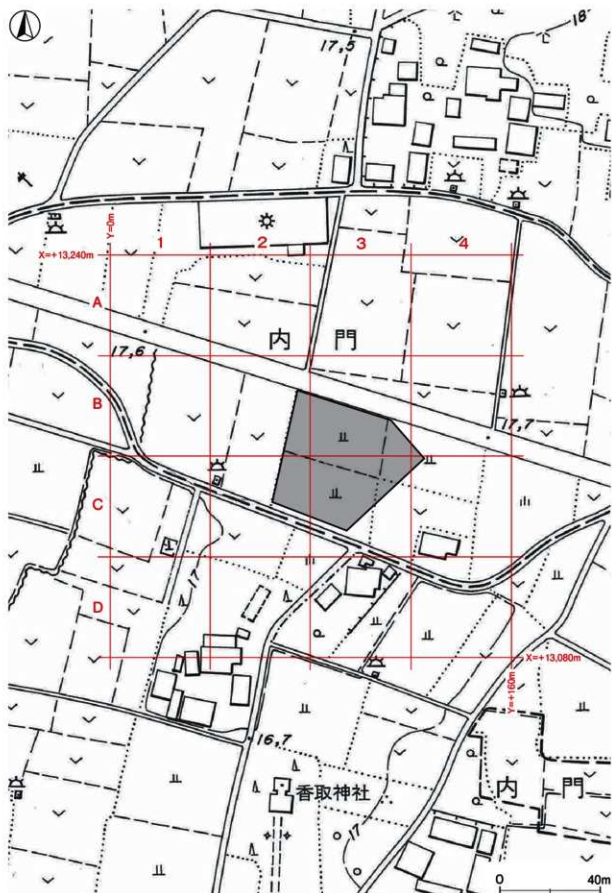
第7層は、にぶい褐色を呈するハードローム層である。酸化した鉄分を含み、締まりはさらに強く、層厚は26～36cmである。

第8層は、明褐色を呈するハードローム層である。酸化した鉄分を多量に含み、締まりはさらに強い。層厚は40cmまで確認したが、下部は未掘のため不明である。

遺構は、第2層の上面で確認した。調査区域内は全体が台地上の平坦面にあたるが、確認面は10cm程度の比高差があり、北部が高く、南東部が低くなる傾向がある。



第44図 基本土層図



第45図 井草本田遺跡群調査区設定図（境町都市計画図2,500分の1から作成）

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、土坑1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

土坑

第12号土坑（第46図）

位置 調査区西部のB3f1区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径0.50m、短径0.40mの楕円形で、長径方向はN-59°-Eである。深さは35cm、底面は皿状で、壁は外傾している。

覆土 3層に分層できる。混入物や堆積状況から、第3層を埋め戻した後、自然堆積している。

土層解説

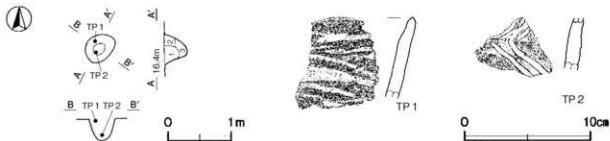
1 暗褐色 ローム粒子少量

3 褐色 ロームブロック中量

2 黒暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片4点（深鉢）が、覆土上層や下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前葉に比定できる。



第46図 第12号土坑・出土遺物実測図

第12号土坑出土遺物観察表（第46図）

番号	種別	型種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	外・内面ナデ 一部磨き	覆土上層	
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐色	沈層で区画 内面磨き	覆土下層	

2 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、土坑2基、溝跡6条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 土坑

第5号土坑（第47図）

位置 調査区中央部のC3a5区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 確認面では、長軸1.14m、短軸0.98mの長方形で、底面では北側が一段下がり、そこから横穴状に北に向かって掘り込んでいる。段差は41cmで、横穴状になる部分は、奥行0.84m、横幅0.83mの方形で、

確認面からの深さは93cmである。主軸方向は $N-18^{\circ}-E$ で、底部は平坦で、北壁を除いて壁は直立している。

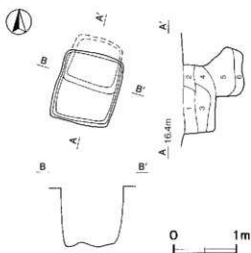
覆土 6層に分層できる。混入物や堆積状況から、埋め戻されている。横穴部の最下層である第6層は、他の層と異なり、締まりが弱い。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック多量	4 暗褐色	ロームブロック中量
2 黒褐色	ローム粒子少量	5 褐色	ロームブロック少量
3 褐色	ロームブロック多量	6 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師質土器片2点(焙烙)、鉄製品2点(釘)、自然遺物(人歯⁹)が覆土中から出土している。いずれも細片のため図示できない。自然遺物(人歯⁹)は、細片となっており元の形状をとどめていない状態で、横穴部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、第6号土坑と形状の類似することや、主軸方向が近似することから17世紀後半と考えられる。



第47図 第5号土坑実測図

歯と思われる出土遺物から、墓坑として利用されたと考えられる。中世の地下式坑や、5世紀から10世紀にかけてみられる「側壁扶込土坑」と呼称されるタイプの土坑に類似する特徴を持つ。非常に珍しい形態であるが、つくば市鳥名一町田遺跡¹⁾で1基、宇都宮市砂田A遺跡²⁾で12基、類例が確認されている。

注

- 1) 鹿島直樹「鳥名一町田遺跡 鳥名・福田塚一体型特定土地区画整理事業及び常磐新線建設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第230集 2004年3月
- 2) 芹沢清八「砂田A遺跡 一般県道宇都宮環状線に伴う埋蔵文化財発掘調査」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第132集 1993年3月

第6号土坑 (第48図)

位置 調査区中央部のC3c5区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 確認面では、長軸1.09m、短軸1.05mの方形で、底面では北側が一段下がり、そこから横穴状に北に向かって掘り込んでいる。段差は16cmで、横穴状になる部分は、奥行1.12m、横幅0.95mの不整楕円形で、確認面からの深さは75cmである。主軸方向は $N-16^{\circ}-E$ で、底部は凹凸で、北壁を除いて壁は直立している。

覆土 10層に分層できる。混入物や堆積状況から、埋め戻されている。横穴部の最下層である第10層は、他の層と異なり、粘性・締まりともに弱い。

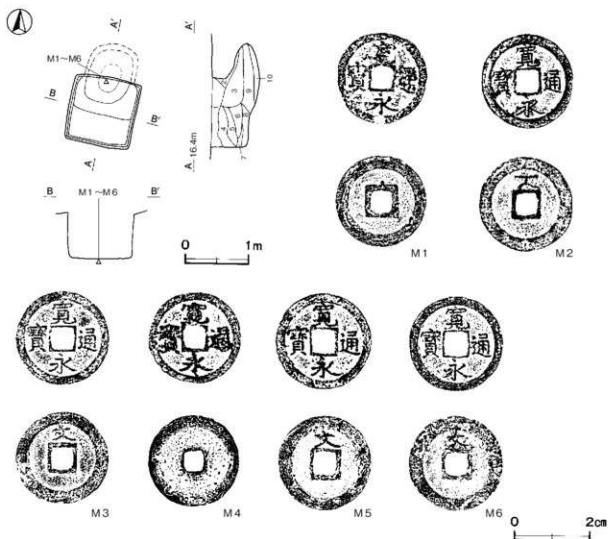
土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量(粘性弱い)	6 褐色	ロームブロック多量
2 黒褐色	ローム粒子微量	7 黒褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック中量	8 暗褐色	ロームブロック中量
4 暗褐色	ロームブロック多量	9 暗褐色	ロームブロック少量
5 黒褐色	ローム粒子少量	10 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片2点(甕)、銭貨6点が覆土中から出土している。銭貨は、M1～M6が重なり融着した状態で第10層中から出土している。

所見 時期は、出土遺物の六道銭の組み合わせから、1668～1697年間の可能性が高い。銭貨の出土状況から、

墓坑として利用されたと考えられる。第5号土坑と同様の特徴を持つ。



第48図 第6号土坑・出土遺物実測図

第6号土坑出土遺物観察表(第48図)

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重量	材質	初鋳年	特徴	出土位置	備考
M 1	寛永通宝	2.44	0.54	0.11	2.99	銅	1606	古寛永 背無し	第10層中	PL14
M 2	寛永通宝	2.52	0.57	0.11	3.95	銅	1668	新寛永 背文	第10層中	PL14
M 3	寛永通宝	2.48	0.57	0.11	3.11	銅	1668	新寛永 背文	第10層中	PL14
M 4	寛永通宝	2.44	0.55	0.08	2.51	銅	1606	古寛永 背無し	第10層中	PL14
M 5	寛永通宝	2.51	0.61	0.10	2.59	銅	1668	新寛永 背文	第10層中	PL14
M 6	寛永通宝	2.52	0.60	0.11	3.06	銅	1668	新寛永 背文	第10層中	PL14

表8 江戸時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
5	C 3a5	N - 18° - E	長方形	1.40 × 0.98	90	平凹	直立	人為	土師質土器, 鉄製品, 自然遺物	
6	C 3c5	N - 16° - E	方形	1.62 × 1.05	75	平凸	直立	人為	土師質土器, 鉄貨	

(2) 溝跡

第1号溝跡 (第49・57図)

位置 調査区南部のC2b8～C3e7区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 C2b8区で調査区域外から東方向(N-76°-W)へ直線的に延び、C3e7区で止まっている。確認できた長さは38.64mで、上幅98～200cm、下幅11～30cmである。深さ75～85cmで、底面はほぼ平坦である。断面はU字状で、壁は下部で外傾し、上部で緩やかに立ち上がっている。

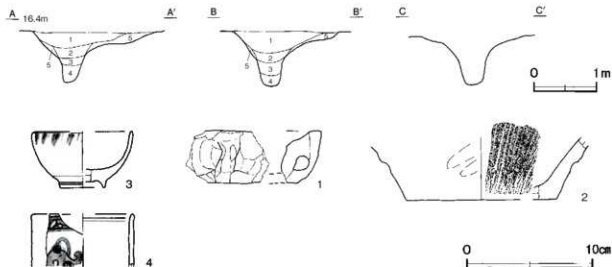
覆土 5層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況から、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片31点(小皿1, 焙烙4, 鉢1, 鉢類25), 瓦質土器片1点(甍), 陶器片15点(碗3, 碗類2, 皿1, 鉢類7, 播鉢1, 瓶類1), 磁器片13点(碗), 土製品1点(泥面子), 石器3点(石白1, 砥石2)のほか、縄文土器片6点(深鉢), 剥片3点が全域に散在した状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から18世紀後半と考えられる。直線的な形状から、区画溝の可能性がある。



第49図 第1号溝跡・出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表(第49図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考		
1	土師質土器	焙烙	-	(4.1)	-	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	口唇部面取り 外・内面ナデ	影響に耳部貼り付け後底部接合	覆土中層 5%	PL14	
2	陶器	播鉢	-	(4.9)	[120]	長石・石英に多い			6本単位の楕円 外面押圧痕	-	丹波	覆土中層 10%	PL14
3	磁器	染付土碗	[7.9]	4.5	[3.4]	磁器 明オリーブ灰			雨降り文	透明釉	肥前	覆土中層 40%	PL14
4	磁器	染付土碗	[7.9]	(4.2)	-	磁器 灰白			花押草 山水文。	透明釉	肥前	覆土中層 10%	PL14

第2号溝跡（第50図）

位置 調査区東部のB3g8～C3d7区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 B3g8区で調査区域外から南方向（N-10°-E）へ直線的に伸び、C3d7区で止まっている。C3a8区より北側は、東に少しずつ移動しながら4回軌道を変えている。確認できた長さは25.31mで、軌道の変更を含めた全体の幅55～138cm、下幅3～52cmである。深さ14～34cmで、断面はU字状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3回掘り直しており、7層に分層できる。第1～3層が最初の溝に堆積し、第4・5層が2回目の溝に堆積、第6層が3回目の溝に堆積、第7層が最後の溝に堆積している。それぞれ周囲から土砂が流入した堆積状況であることから、自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量	5 暗褐色 ロームブロック少量
2 暗褐色 ローム粒子中量	6 暗褐色 ロームブロック中量
3 暗褐色 ロームブロック少量（第5層よりやや多め）	7 暗褐色 ローム粒子少量
4 暗褐色 ロームブロック微量	

遺物出土状況 土師質土器片1点（鉢類）、瓦質土器片1点（甕）、陶器片3点（碗1、鉢類2）、石器1点（砥石）、鉄製品1点（釘₉）が全域に散在した状態で出土している。遺物は細片のため、図示できない。

所見 最終的な埋没時期は、他の溝との重複関係から18世紀以前と考えられる。直線的な形状や、掘り直していることから、区画溝と考えられる。

第3号溝跡（第51-52図）

位置 調査区東部のB3h9～C3e8区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第4～6号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 C3e8区で調査区域外から北方向（N-11°-E）へ直線的に伸び、B3i9区で東方向（N-36°-E）へ向かい、B3h9区で再び調査区域外に伸びている。C3e8～C3d8区では、掘り直した痕跡がみられる。B3h9区では、段が存在しテラス状に広がっている。確認できた長さは27.37mで、幅50～207cm、下幅2～33cmである。深さ16～56cmで、北に向かって浅くなっており、確認した範囲内で30cm以上の標高差がある。断面はU字状または逆台形で、壁はC3e8区では直立し、北に向かうと緩やかに立ち上がっている。

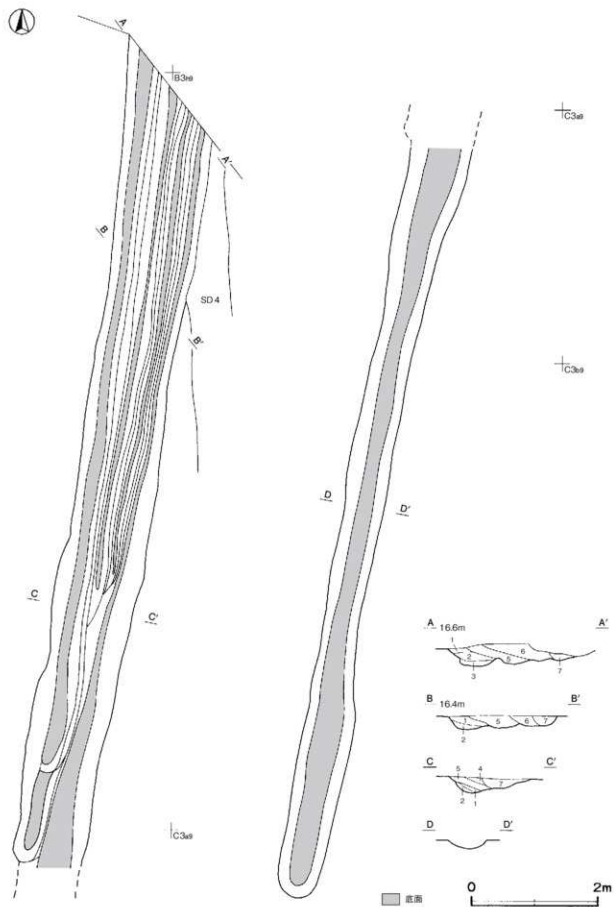
覆土 3層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況から、自然堆積である。

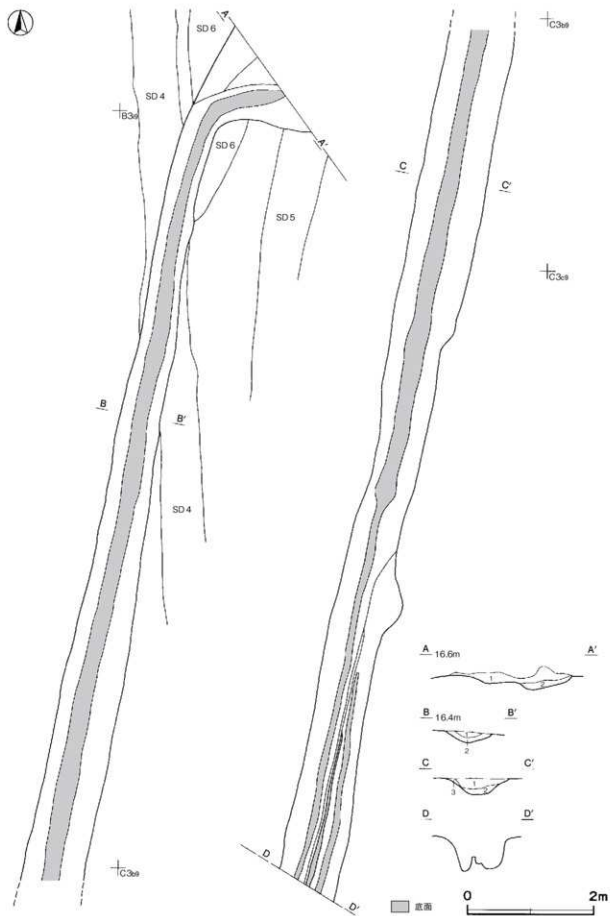
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子微量	3 暗褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ロームブロック微量	

遺物出土状況 土師質土器片3点（小皿、焙烙、鉢類）、陶器片3点（碗、皿、鉢）、磁器片1点（碗）、剥片1点のほか、縄文土器片3点（深鉢）が全域に散在した状態で出土している。

所見 重複関係から第2～6号溝の中で一番新しく、時期は、出土土器から18世紀代と考えられる。第2・5号溝と軸方向が一致しており、直線的な形状となっていることから、区画溝と考えられる。





第51図 第3号溝跡実測図



第52図 第3号溝跡出土遺物実測図

第3号溝跡出土遺物観察表 (第52図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
5	土製瓦片	筒筒	(37.8)	(4.2)	-	長石・石英	褐	普通	口唇部面取り 外・内面ナテ 輪積み痕	覆土中	10% PL14

第4号溝跡 (第53・57図)

位置 調査区東部のB 3h9～C 3c9区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第2・5号溝跡、第7号土坑を掘り込み、第3号溝、第16号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 C 3c9区で調査区域外から北方向(N-4°-W)へ直線的に延び、B 3h9区で再び調査区域外に延びている。確認できた長さは23.50mで、上幅60～85cm、下幅40～56cmで、深さ8～19cmである。断面はU字状で、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 4層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況から、自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 3 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量 |

所見 時期は、遺構の重複関係から、18世紀以前と考えられる。出土遺物はなく、性格は不明である。



第53図 第4号溝跡実測図

第5号溝跡 (第54・57図)

位置 調査区東部のB 3i9～C 3b9区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3・4号溝に掘り込まれている。第7号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 C 3b9区から北方向(N-10°-E)へ直線的に延び、B 3i9区で再び調査区域外に延びている。確認できた長さは14.45mで、上幅33～77cm、下幅10～26cmで、深さは21～29cmである。断面はU字状で、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

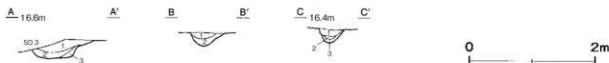
覆土 3層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況から、自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量 | |

遺物出土状況 縄文土器片1点(深鉢)が出土している。

所見 時期は、遺構の重複関係や、他の溝と覆土の様相が類似していることから、18世紀以前と考えられる。第2・3号溝と軸方向が一致しており、直線的な形状となっていることから、区画溝と考えられる。



第54図 第5号溝跡実測図

第6号溝跡 (第55-57図)

位置 調査区東部のB3h9～B3j9区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3号溝に掘り込まれている。

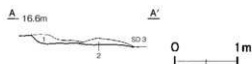
規模と形状 第3号溝に掘り込まれ、調査区域外へ延びているため、確認できた長さは3.98mである。深さ7cm、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況から、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

所見 時期は、遺構の重複関係から、18世紀以前と考えられる。出土遺物はなく、性格は不明である。



第55図 第6号溝跡実測図

表9 江戸時代溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模			断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考	
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)						深さ(cm)
1	C2i6～C3e7	N-76°-E	直線状	(38.64)	0.98～ 2.00	0.11～ 0.30	75～85	U字状	外積 磁石	自然	土師質土器、土質土器、 陶器、磁器、土製品、石	
2	B3j8～C3d7	N-10°-E	直線状	(25.31)	0.55～ 1.38	0.03～ 0.52	14～34	U字状	磁石	自然	土師質土器、瓦質土器、 陶器、石砂、鉄製品	本跡→SD4
3	B3i9～C3e8	N-11°-E N-36°-E	直線状	(27.37)	0.50～ 2.07	0.02～ 0.33	16～36	U字状 逆台形	直立 磁石	自然	土師質土器、陶器、磁器	SD4～6→本跡
4	B3i9～C3e9	N-4°-W	直線状	(23.50)	0.60～ 0.85	0.40～ 0.56	8～19	U字状	磁石	自然		SD2・5、SK7→ 本跡→SD3・4
5	B3j9～C3i9	N-10°-E	直線状	(14.65)	0.33～ 0.77	0.10～ 0.26	21～29	U字状	磁石	自然		本跡→SD3・4 SK7断面不明
6	B3i9～B3j9	-	不明	(3.98)	不明	不明	7	不明	磁石	自然		本跡→SD3

3 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明確でない土坑23基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 土坑

土坑については、規模・形状等について遺構全体図(第57図)と一覧表で掲載する。

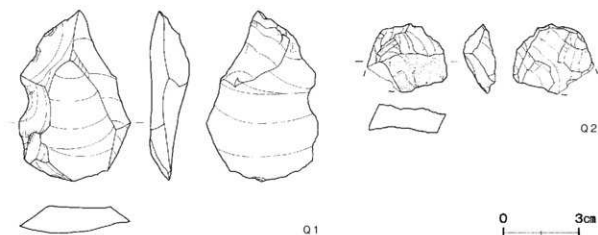
表10 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	C4a1	N-21°-E	精円形	0.46×0.34	16	皿状	磁石	人為		
2	C3e9	N-68°-E	精円形	0.46×0.32	72	皿状	直立	人為		
3	B3j9	N-63°-E	精円形	0.32×0.26	62	皿状	直立	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
4	B 3j0	N-7°-E	長方形	(2.56) × 0.90	12	平坦	直立	人為		
7	C 3a9	N-46°-E	[楕円形]	(0.31) × 0.31	49	皿状	直立 外傾	人為		本跡→SD 4 SD 5 新注(不明)
8	C 3c4	-	円形	0.53 × 0.50	12	平坦	縦斜	人為		
9	C 3b3	N-9°-E	楕円形	0.74 × 0.52	23	平坦	外傾 縦斜	人為		
10	B 314	N-28°-E	楕円形	0.85 × 0.50	18	平坦	外傾 縦斜	人為		
11	C 3c9	N-10°-E	楕丸長方形	2.38 × 0.79	15	平坦	外傾	人為		
13	C 3d1	N-28°-E	楕円形	0.84 × 0.65	34	皿状	外傾	人為		
14	C 3d1	N-9°-E	楕円形	0.83 × 0.70	36	凹凸	外傾	人為		
15	C 3d2	N-76°-E	楕円形	1.10 × 0.61	30	凹凸	外傾	人為		
16	C 3b9	N-13°-E	[長方形]	[1.24 × 0.60]	8	平坦	縦斜	自然		SD 4→本跡
17	C 3e3	-	[円形]	0.74 × [0.72]	57	皿状	外傾	人為		SK18→本跡
18	C 3e3	N-35°-E	楕円形	1.17 × 0.85	85	皿状	外傾 縦斜	人為		本跡→SK17
19	C 3b9	-	円形	0.32	32	皿状	外傾	人為		
20	C 3a9	N-90°-W	楕円形	0.34 × 0.24	18	皿状	縦斜	人為		
21	C 3a0	-	円形	0.24	20	皿状	外傾	人為		
22	B 3j0	N-75°-W	楕円形	0.30 × 0.18	24	皿状	外傾	人為		
23	C 3a9	N-80°-E	楕円形	0.34 × 0.24	28	皿状	直立 外傾	人為		
24	B 3j9	N-79°-E	楕円形	0.43 × 0.33	23	凹凸	外傾	人為		
25	B 3j9	N-64°-W	楕円形	0.70 × 0.39	17	皿状	縦斜	人為		
26	B 3j0	N-17°-W	楕円形	0.54 × 0.48	48	皿状	外傾	人為		

(2) 遺構外出土遺物 (第 56 図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第 56 図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第 56 図)

番号	部 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q 1	副片	67	44	1.6	335	頁岩	使用痕あり	SD 1	PL14
Q 2	副片	27	(32)	1.3	(9.1)	チャート	自然面残存	SD 1	PL14

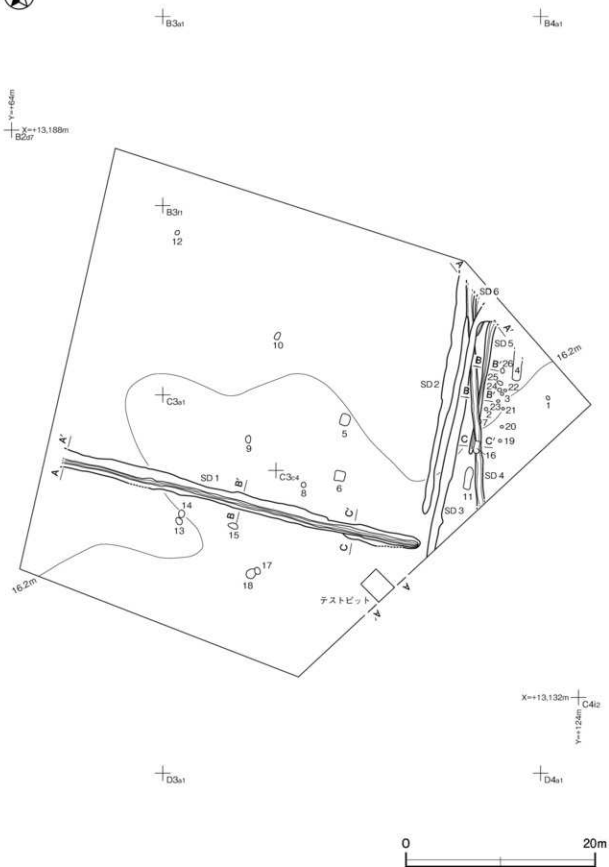
第4節 ま と め

今回の調査で、墓坑2基を確認した¹⁾。確認面は方形または長方形であるが、底面の北側半分が一段下がり、そこから北側の壁を横状に掘り込んでいるものである。時期は異なるものの、5世紀から10世紀にかけてみられる「側壁扶込土坑」や、中世の地下式坑に類似する形状である。これら2基の墓坑の時期は、第6号土坑から六道銭が出土しており、鈴木公雄氏のセリエーション分析の結果²⁾に当てはめると、1668～1697年間の可能性が高い。第5号土坑は時期確定に耐えうる遺物が出土していないが、形状や主軸方向がほぼ同じである点から、第6号土坑との時期差は大きくないものとみられる。こうした形態の墓は、江戸時代のものでは非常に珍しいものである。当時の墓の形態はバラエティーに富んでおり、被葬者の身分・階級をあらわすものであることから³⁾、被葬者は特殊な身分の人物であった可能性もある。形状が類似しているつくば市鳥名一町田遺跡の第1号地下式坑からは、銅鏡が出土しており、報告者は僧籍者の可能性も提示している⁴⁾。境町に残る近世の記録では、当遺跡は内門村に位置しており、村内には現在も調査区から西に500mほど離れた場所に位置する大翁寺があった⁵⁾。当遺跡の土坑からは、僧籍者を連想させるような出土遺物はないため、被葬者の身分を考える上での可能性の一つとして提示しておく。

江戸時代で同じ形状の土坑が墓として利用された事例として、前述した鳥名一町田遺跡と宇都宮市砂田A遺跡⁶⁾がある。出土遺物から判断して、鳥名一町田遺跡で確認された1基が18世紀中頃、砂田A遺跡で確認された12基が17世紀後半から幕末にかけて造営されたものである。本遺跡で確認された2基と同時期か新しいもので、事例数は少ないながらこの形状の土坑は、江戸時代を通じて墓として利用されたものであると考えられる。また、前の時代との関連性についてであるが、仲山英樹氏は、「側壁扶込土坑」が墓坑であり、墓域の構成において火葬墓等の形態に対し従属的な性格をもち、それのみ単独で存在することが普遍的には認められないものであると述べている⁷⁾。当遺跡の墓坑は、単独で2基しか確認されていない点は異なるが、墓であるという点や、特徴的な形状は一致する。また、斉藤弘氏は、中世の地下式坑の機能として、再葬に関連する骨化施設という可能性を挙げており、鳥名一町田遺跡で確認されたものについて、「その痕跡を伝えている」ものとしている⁸⁾。伝統的葬法として引き継がれてきたことを想定するのは難しいが、その特徴的な形態と埋葬を結びつける意識は、時代を超えて伝わっていたことも考えられる。

註

- 1) 第5号土坑と第6号土坑の2基であるが、本誌では機能に重点をおき「墓坑」と表記する。
- 2) 鈴木公雄「六道銭の考古学」『銭の考古学』吉川弘文館 2002年5月
- 3) 土生田純之編『事典 墓の考古学』吉川弘文館 2013年6月
- 4) 鹿島直樹「鳥名一町田遺跡 鳥名・福田坪一体型特定定地区画整理事業及び常磐新線建設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第230集 2004年3月
- 5) 境町史編さん委員会「下総 境の生活史 因説・境の歴史」境町 2004年3月
- 6) 芹沢清八「砂田A遺跡 一般県道宇都宮環状線に伴う埋蔵文化財発掘調査」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第132集 1993年3月
- 7) 仲山英樹「古代東国における墳墓の展開とその背景」『研究紀要』第1号 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1992年3月
- 8) 斉藤弘「葬施設説からみた地下式坑の型式分類」『中世の地下室』東国中世考古学研究会 2009年5月



第 57 図 井草本田遺跡群遺構全体図

写 真 图 版

新溜上遺跡
大日後遺跡
井草本田遺跡群



新溜上遺跡出土古墳前期土器集合

遺跡遠景



調査区全景



第73号土坑
遺物出土状況



PL2



第1号竖穴建物跡
完掘状況



第2号竖穴建物跡
遺物出土状況



第2号竖穴建物跡
完掘状況



第3号豎穴建物跡
炉遺物出土状況



第3号豎穴建物跡
完掘状況



第4号豎穴建物跡
遺物出土状況

PL4



第5号竖穴建物跡
遺物出土狀況①



第5号竖穴建物跡
遺物出土狀況②



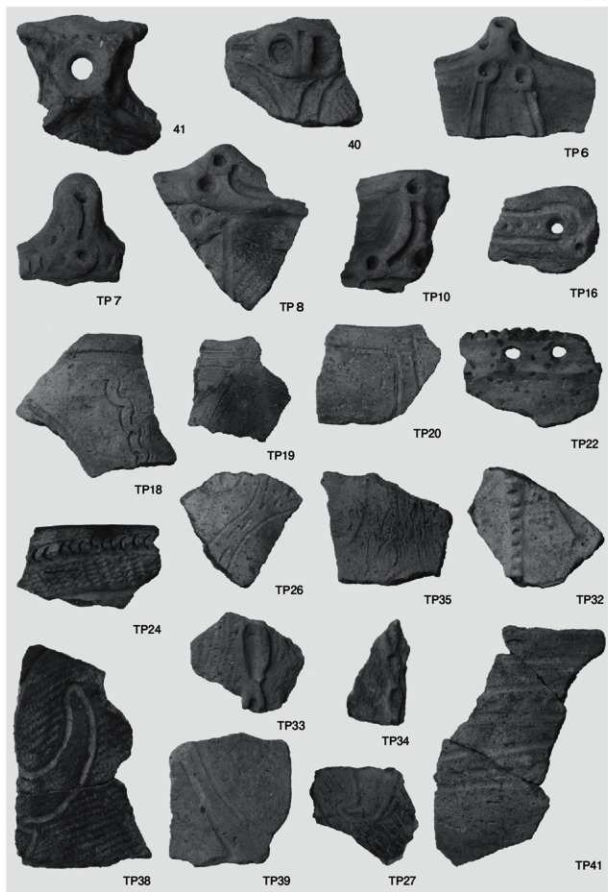
第1号竖穴遺構
完掘狀況



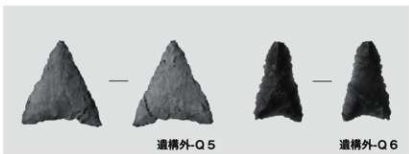
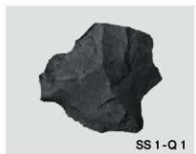
第1・2・3・4・5号竖穴建物跡出土土器



第1・2・4・5号竖穴建物跡出土土器



遺構外出土土器



第73・78号土坑出土土器，第1号石器集中地点，遺構外出土石器・石核・剥片

調査区全景



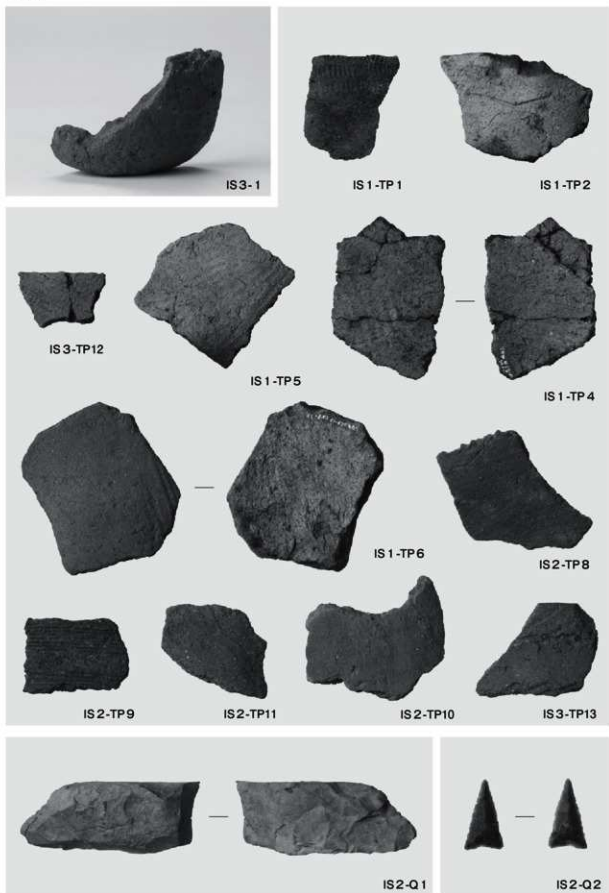
第1号遺物集中地点
遺物出土状況



第2号遺物集中地点
土層断面



PL10



第1・2・3号遺物集中地点出土土器・石器・石核



遺構外出土土器・石器・剥片

并草本田遺跡群

PL12



調査区全景



第5号土坑
完掘状況



第6号土坑
完掘状況

第 1 号 溝 跡
完 掘 状 況

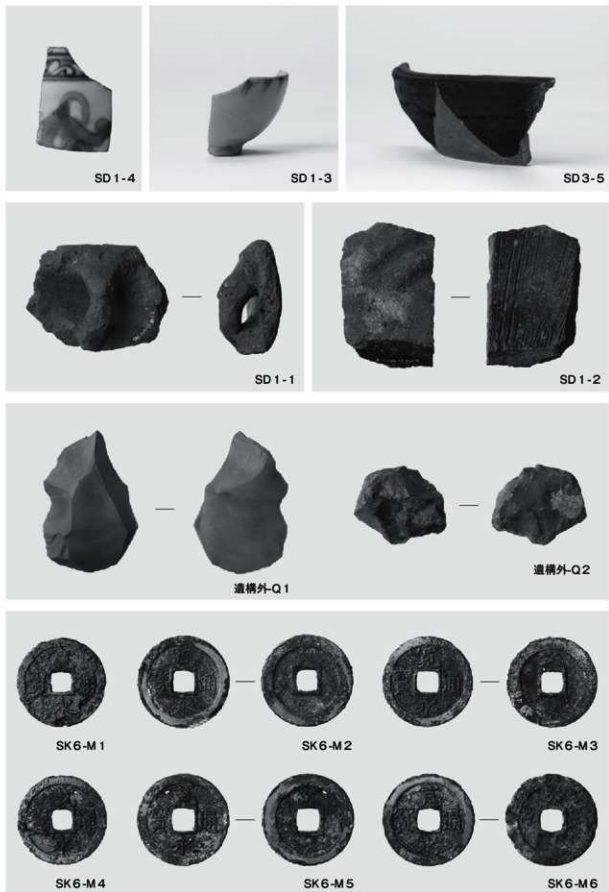


第 2 ~ 6 号 溝 跡
完 掘 状 況



第 4 号 溝 跡
完 掘 状 況





第1・3号溝跡出土土器，遺構外出土剥片，第6号土坑出土銭貨

抄 録

ふりがな	しんためういせき だいにちうしろいせき いぐさほんでんいせきぐん							
書 名	新溜上遺跡 大日後遺跡 井草本田遺跡群							
副 書 名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第393集							
著 者 名	盛野浩一							
編 集 機 関	公益財団法人茨城県教育財団							
所 在 地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発 行 日	2015(平成27)年3月16日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード	北 緯	東 経	標 高	調査期間	調査面積	調 査 原 因
新溜上遺跡	茨城県坂東市富田字 新溜上408-2番地ほか	08218 - 229	36度 05分 34秒	139度 52分 30秒	16 ~ 17m	20130801 ~ 20131231	7,660 m ²	一般国道468号 首都圏中央連絡 自動車道建設事 業に伴う事前調 査
大日後遺跡	茨城県坂東市菅谷字 大日後12-3番地ほか	08544 - 058	36度 06分 42秒	139度 51分 14秒	16 ~ 17m	20130801 ~ 20131231	3,476 m ²	
井草本田 遺 跡 群	茨城県筑前郡境町大 字山崎字香取後2235 番地ほか	08546 - 044	36度 07分 07秒	139度 50分 03秒	16m ~ 20131231	20130801 ~ 20131231	2,064 m ²	
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
新溜上遺跡	包蔵地	縄文	石器出土地点		1ヶ所		石核	
	集落跡	縄文	沟跡	1基	縄文土器(深鉢・鉢・浅鉢)			
		古 墳	堅穴建物跡	5棟	土師器(埴・高坏・小形壺・壺・ 台付甕・甕・瓶)、土製品(土玉・ 支脚)			
		時期不明	沟跡	1基	縄文土器(深鉢・鉢・浅鉢)、土師 器(高坏・甕)、石器(ナイフ形石器・ 鎌・打製石斧・石皿・敲石)、剥片			
大日後遺跡	包蔵地	縄文	遺物集中地点		3ヶ所		縄文土器(深鉢)、石器(鎌)、石核	
	集落跡	時期不明	土坑	32基	縄文土器(深鉢)、土師器(坏・甕)、 須恵器(甕)、土師質土器(小皿)、 瓦質土器(播鉢)、陶器(碗・蓋・ 皿・瓶・甕)、磁器(碗)、石器(尖 頭器・鎌・磨石・スタンプ型石器・ 砥石)、剥片			
		溝跡	2条					
井草本田 遺 跡 群	集落跡	縄文	土坑	1基	縄文土器(深鉢)			
		江 戸	溝跡	6条	土師質土器(小皿・焙烙・鉢)、 瓦質土器(甕)、陶器(碗・皿・鉢・ 播鉢・瓶)、磁器(碗)、土製品(泥 面子)、石器(石臼・砥石)			
		時期不明	土坑	23基	縄文土器(深鉢)、土師質土器(甕)、 陶器(碗)、磁器(碗)、石器(火 打石)、剥片			
	墓 域	江 戸	土坑	2基	土師質土器(焙烙)、金属製品(銭貨)			
要 約	新溜上遺跡では、古墳時代前期の集落跡を確認した。また、縄文時代の沟跡と土坑を確認しており、土器の出土状況から調査区周辺に集落が存在している可能性が考えられる。大日後遺跡では、縄文時代早期後葉の遺物集中地点を確認した。井草本田遺跡群では、江戸時代の土坑と溝跡を確認した。土坑は墓として利用されており、溝はそれを区画するものであった可能性がある。							

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Home Premium ServicePack1
編集		Adobe InDesign CS6
図版作成		Adobe Illustrator CS6
写真調整		Adobe Photoshop CS6
Scanning		6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
		図面類 EPSON ES-1000G
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第393集

新溜上遺跡 大日後遺跡 井草本田遺跡群

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成27(2015)年 3月13日 印刷

平成27(2015)年 3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P http://www.ibaraki-maibun.org

印刷 野崎印刷紙器株式会社

〒311-0114 那珂市東木倉280番地3

TEL 029-295-3331